復興支援プロジェクトシンポジウム2014《名古屋》

復興への“声”を伝える

～ソーシャルワーカーのまなざしと歩みの継承へ～

日時　平成　26年　2月　17日（月）
　　開始　13時　00分
　　終了　16時　30分

場所　日本福祉大学名古屋キャンパス 北館8階

主催　福祉系大学経営者協議会

この事業は **独立行政法人福祉医療機構 社会福祉振興助成事業** の助成を受けています。

「復興支援プロジェクトシンポジウム2014《名古屋》」プログラム

○ 13:00　【 開会 】

・福祉系大学経営者協議会副会長挨拶
日本福祉大学 理事長　丸山 悟

・シンポジウム《名古屋会場》代表挨拶
同朋大学 学長　浅野 玄誠

○ 13:05　【 “声”プロジェクト概要説明 】

関西福祉科学大学 准教授　遠藤 洋二
(福祉系大学経営者協議会復興支援委員長)

○ 13:25　【 ソーシャルワーカー講演 】

社団法人岩手県社会福祉士会 相談役
社会福祉法人岩手和敬会 理事　佐々木 裕彦

○ 14:25　【 休憩 】

○ 14:35　【 学生発表 】

日本福祉大学 社会福祉学部
上野 莉恵・鈴木 秀明・星野 真希
中部学院大学 人間福祉学部
石川 智也・小川 侑希・廣野 美月・古田 陽亮
関西福祉科学大学 社会福祉学部
泉 綾子

○ 15:20　【 休憩 】

○ 15:30　【 パネルディスカッション 】

★コーディネーター
中部学院大学 人間福祉学部 准教授　大藪 元康

社団法人岩手県社会福祉士会 相談役
社会福祉法人岩手和敬会 理事　佐々木 裕彦

関西学院大学 人間福祉学部 教授　池埜 聡

関西福祉科学大学 社会福祉学部　泉 綾子
中部学院大学 人間福祉学部　石川 智也
日本福祉大学 社会福祉学部　鈴木 秀明

○ 16:30　【 閉会挨拶 】

中部学院大学 副学長　葛谷 昌之

《 目　次 》

【 “声”プロジェクト概要説明 】
復興への“声”を伝える
―ソーシャルワーカーのまなざしと歩みの継承へ―

関西福祉科学大学 准教授　遠藤 洋二
（福祉系大学経営者協議会復興支援委員長）　・・・・　p. 1～p.26

【 ソーシャルワーカー講演 】
岩手災害派遣ターゲットシステム
～「岩手県災害派遣福祉チーム」誕生までのあゆみ～

社団法人岩手県社会福祉士会 相談役
社会福祉法人岩手和敬会 理事　佐々木 裕彦　・・・・　p.27～p.53

【 学生発表 】
ソーシャルワーカーの声プロジェクト

日本福祉大学 社会福祉学部
上野 莉恵・鈴木 秀明・竹倉 文恵・星野 真希　・・・・　p.55～p.68

ソーシャルワーカーとしてのつながり
～岩手と宮城の被災地を通して～

中部学院大学 人間福祉学部
小川 侑希・石川 智也・廣野 美月・古田 陽亮　・・・・　p.71～p.74

ソーシャルワーカー“声”プロジェクト
学生“語り部”プロジェクト

関西福祉科学大学
社会福祉学部 社会福祉学科4年　泉 綾子　・・・・　p.77～p.91

Memo

復興支援プロジェクトシンポジウム　2014

復興への“声”を伝える

― ソーシャルワーカーのまなざしと歩みの継承へ ―

2014年2月

関西福祉科学大学　遠藤　洋二
（福祉系大学経営者協議会復興支援委員長）

関係学会・シンポジウムにおいて・・・・

発災直後は救急救命が最優先され、生活支援を主体とするソーシャルワークは、被災者の生命身体の安全確保がされてからその機能を発揮する

災害によってソーシャルワーカーが活用する社会資源が破壊され、「資源とつなぐ」機能が失われたため効果的な援助ができない

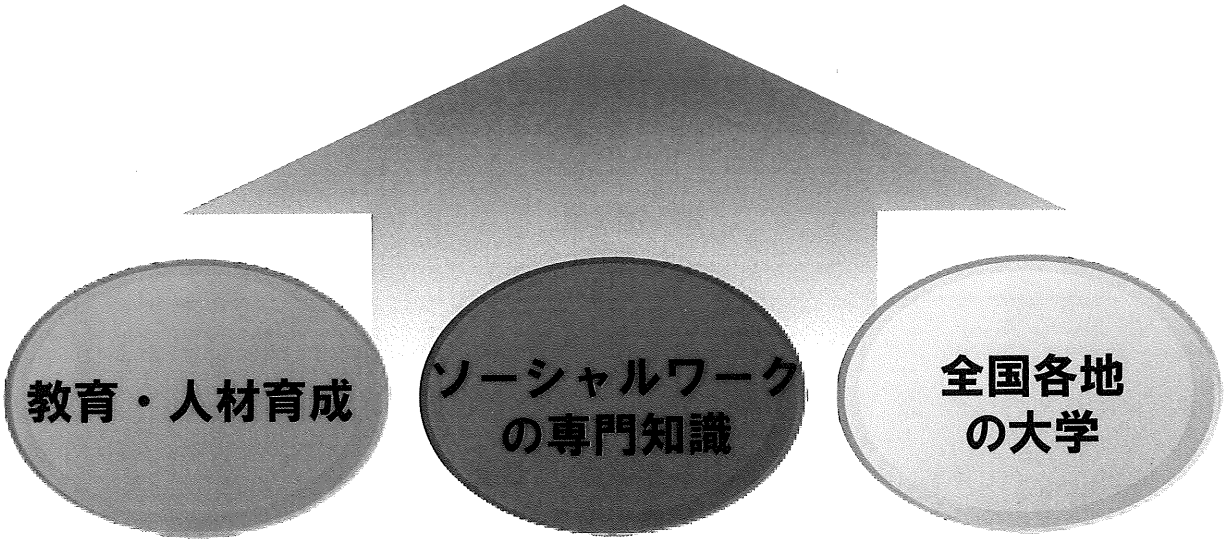
被災地におけるソーシャルワーカーの援助対象があまりにも広範であり、一般化、抽象化することが困難である

実態を知りたい

発表者の実体験（阪神淡路大震災）と乖離

福祉系大学経営者協議会　復興支援プロジェクト

災害支援における社会福祉専門職（ソーシャルワーカー）に焦点をあてたプロジェクト



3

ソーシャルワーカーの”声”プロジェクト

ソーシャルワーカーの“声”プロジェクト

ソーシャルワーカーが災害時に「何ができるのか」、「何をすべきなのか」などを、実際に災害支援活動に従事ソーシャルワーカーから学生が聴き取り、記録として残す。

学生“語り部”プロジェクト

ソーシャルワーカーの”声”プロジェクト」で聴き取った内容を整理し、講演や出版物などを通じて発信する。

4

ソーシャルワーカーの“声”プロジェクト

5

“声”プロ：プロセス

事前学習	フィールドワーク	事後作業
・各大学で実施	・座学（講演） ・視察 ・インタビュー ・グループ討議 期間：4泊5日 チーム：学生4名 教員1名	・インタビューの逐語録を作成 ・逐語録の分析 ・報告書作成

6

“声” プロ：事前学習（関西福祉科学大学の例）

1日目	オリエンテーション 東北大震災の被害状況
2日目	被災者支援の基本
3日目	インタビューの方法（１）
4日目	インタビューの方法（２） ①阪神淡路大震災記念「人と防災未来センター」見学 ②阪神・淡路大震災で活動経験のあるソーシャルワーカーへのインタビュー
5日目	ソーシャルワーカーの業務

“声” プロ：フィールドワークの概要

派遣区分	期間	活動場所	参加大学	学生	教職員	インタビュー数
第1次	平成24年3月12日～3月17日	宮城県	文京学院大学	4	2	4
			関西福祉科学大学	8	3	6
第2次	平成24年8月21日～8月25日	岩手県	淑徳大学	4	1	2
			日本社会事業大学	4	3	2
			中部学院大学	4	1	2
			関西福祉科学大学	4	3	2
	平成24年9月3日～9月7日	宮城県	文京学院大学	4	3	2
			日本福祉大学	4	3	2
第3次	平成25年3月3日～7日	宮城県	淑徳大学	4	2	2
			中部学院大学	4	1	2
			関西福祉科学大学	4	2	2
第4次	平成25年8月20日～24日	福島県	淑徳大学	4	2	2
			文京学院大学	3	3	2
			関西福祉科学大学	4	3	2

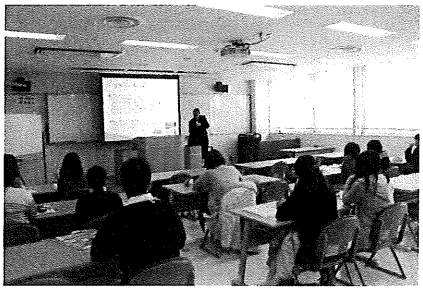
フィールドワーク：座学



岩手県社会福祉士会
佐々木　裕彦　氏



宮城県社会福祉士会
鈴木　守幸　氏



福島県社会福祉士会
島野　光正　氏

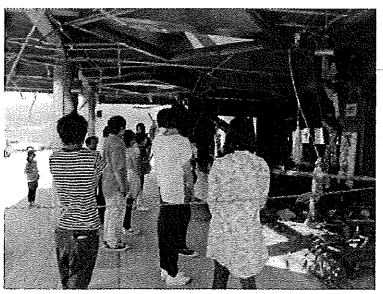
フィールドワーク：視察風景



宮城県東松島市



福島県富岡町

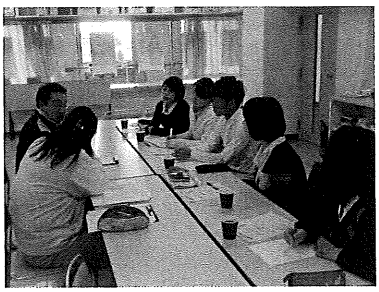


岩手県陸前高田市

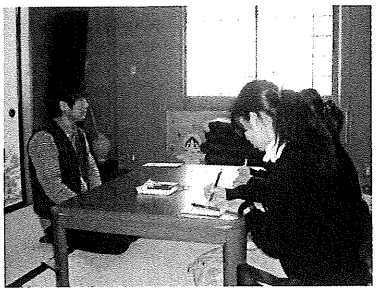
フィールドワーク:インタビューの概要

◆対象者は各県社会福祉士会がコーディネート
◆各チーム2名のソーシャルワーク（社会福祉士）
　へインタビュー
◆半構造化
◆了解を得た上で録音
◆２名の学生がインタビューを行い、残りの学生は記録

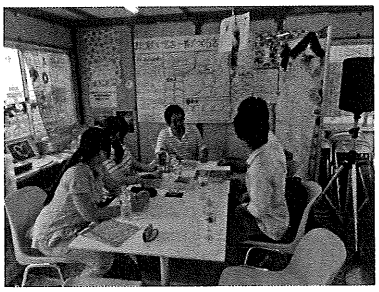
フィールドワーク:インタビュー風景



宮城県登米市　地域包括支援センター



宮城県石巻市　地域包括支援センター



岩手県宮古市　社会福祉協議会

フィールドワーク：インタビュー先（第1次派遣：宮城県）

派遣区分	派遣先	所属	実施日
1次	宮城	石巻市雄勝地域包括支援センター	H24.3.15
1次	宮城	石巻市渡波（わたのは）地域包括支援センター	H24.3.15
1次	宮城	東松島市地域包括支援センター	H24.3.15
1次	宮城	南東北病院・医療福祉相談室	H24.3.15
1次	宮城	気仙沼市地域包括支援センター	H24.3.16
1次	宮城	南三陸町地域包括支援センター	H24.3.16
1次	宮城	亘理町地域包括支援センター	H24.3.16
1次	宮城	名取西地域包括支援センター	H24.3.16

フィールドワーク：インタビュー先（第2次派遣：岩手県・宮城県）

派遣区分	派遣先	所属	実施日
2次	岩手	障がい者支援施設　吉浜荘	H24.8.23
2次	岩手	就労継続支援B型事業所　青松館	H24.8.23
2次	岩手	社会福祉法人　愛育会	H24.8.23
2次	岩手	社会福祉法人　三陸福祉会　さんりくの園	H24.8.23
2次	岩手	釜石市保健福祉部高齢介護福祉課地域包括支援センター	H24.8.24
2次	岩手	大槌町役場　福祉課　民生部	H24.8.24
2次	岩手	山田町保健・老人福祉センター	H24.8.24
2次	岩手	宮古市総合福祉センター	H24.8.24
2次	宮城	仙台市向陽台地域包括支援センター	H24.9.5
2次	宮城	特別養護老人ホーム　せんだんの里	H24.9.5
2次	宮城	多賀城市役所　社会福祉課	H24.9.6
2次	宮城	仙台市泉中央地域包括支援センター	H24.9.6

フィールドワーク：インタビュー先（第3次派遣：宮城県）

派遣区分	派遣先	所属	実施日
3次	宮城	登米市中田・石越地域包括支援センター	H25.3.5
3次	宮城	株式会社 宮城登米広域介護サービス	H25.3.5
3次	宮城	虹の丘地域包括支援センター	H25.3.5
3次	宮城	スキップケアプランセンター	H25.3.6
3次	宮城	涌谷町居宅介護支援事業所	H25.3.6
3次	宮城	特別養護老人ホーム・せんだんの里	H25.3.6

フィールドワーク：インタビュー先（第4次派遣：福島県）

派遣区分	派遣先	所属	実施日
4次	福島	介護老人保健施設　楢葉ときわ園	H25.8.22
4次	福島	渡辺　明社会福祉士事務所	H25.8.22
4次	福島	障害者支援施設　あだたら育成園	H25.8.22
4次	福島	大熊町役場　スクールソーシャルワーカー	H25.8.23
4次	福島	社会福祉法人　いわき福音協会法人本部	H25.8.23
4次	福島	福島県社会福祉士会　事務局	H25.8.23

フィールドワーク:グループ討議



“声” プロ：事後作業

インタビュー（録音） → 逐語録

逐語録 → ソーシャルワーカーの機能、役割を分析

逐語録 → インタビュー集（出版を検討）

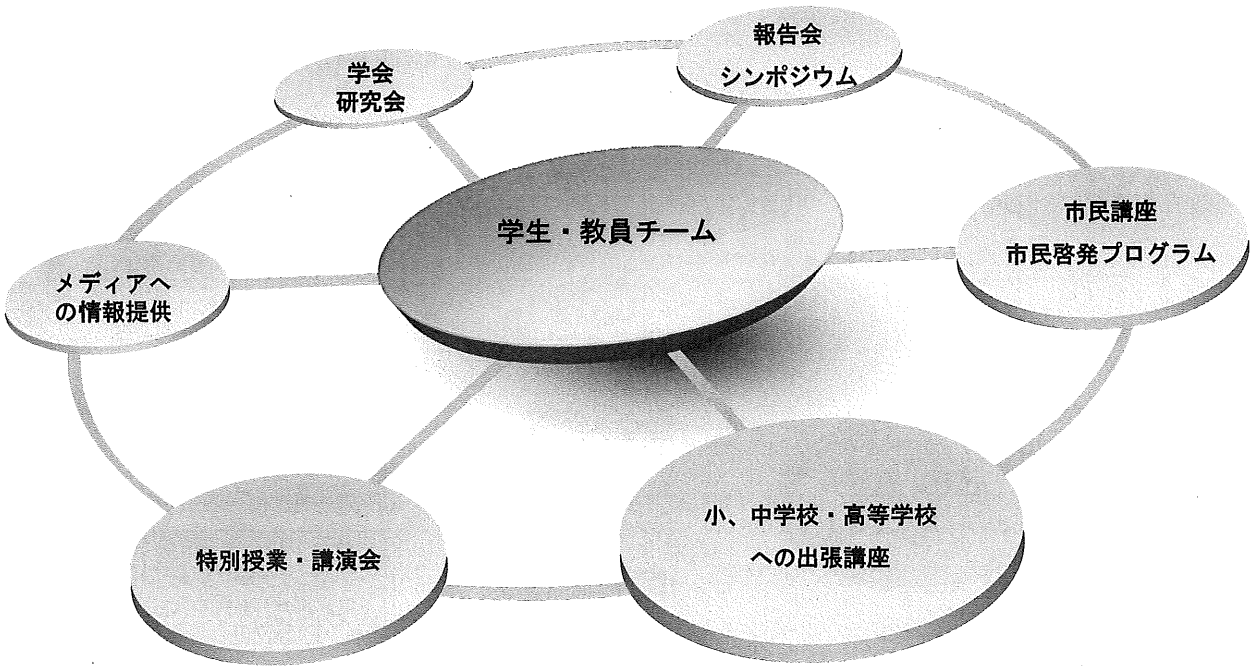
視察・座学インタビュ記録 → 報告書

視察・座学インタビュ記録 → プレゼン（PPスライド・ムービー）

学生“語り部”プロジェクト

19

語り部:概要



20

語り部：報告会・シンポジウム

年月日	行事	開催場所
2013年12月1日	岩手県社会福祉士会との意見交換会	岩手県盛岡市
2013年12月8日	福島県社会福祉士会との意見交換会	福島県郡山市
2013年12月28日	宮城県社会福祉士会との意見交換会	宮城県仙台市
2014年2月8日	東京地区シンポジウム	文京学院大学
2014年2月17日	名古屋地区シンポジウム	日本福祉大学

語り部：市民講座・市民啓発プログラム

年月日	行事	開催場所
2012年5月3・4日	中之島まつり	大阪市
2012年11月10・11日	学園祭“美葉祭”	関西福祉科学大学
2012年12月22日	市民講座	豊中市
2013年11月16・17日	学園祭“美葉祭”	関西福祉科学大学



2012年11月10日「学園祭“美葉祭”」

「中之島まつり」同様、ブースを設けて活動報告を行いながら、「南三陸復興ダコの会」が販売しているキャラクターグッズを学園祭で委託販売を行い、売上金額の全額を送金しました。「南三陸復興ダコの会」は、この大震災で仕事を失った被災者たちの仕事を創出しようと地元のYes工房を拠点に被災者が力をあわせて作った事業所で、自分たちで作った製品をショップやギャラリーで販売しています。目玉は、金色のタコがはちまきを巻いた置物（ゆめ多幸鎮）「オクトパス君（置くとパス）」で置くと試験に合格するという縁起物とあって、国家試験に合格したい学生たちには大人気でした。同会の商品が学園祭で販売されるのは初めてだったそうですが、盛況のうちに終了しました。

語り部：小、中学校・高等学校等への出張講座（1）

年月日	行事	開催場所
2012年11月20日	大阪府立貝塚高等学校	貝塚市
2013年1月29日	奈良県立榛生昇陽高等学校	奈良県宇陀市
2013年2月14日	大阪府立西成高等学校	大阪市
2013年2月18日	大阪府立西成高等学校	大阪市
2013年6月4日	大阪市立大学	大阪市
2013年6月25日	龍谷大学	滋賀県大津市
2013年9月2日	大阪府立みどり清朋高等学校	東大阪市
2013年9月26日	大阪府立金剛高等学校	富田林市
2013年10月28日	大阪府立八尾北高等学校	八尾市
2013年11月1日	大阪府立八尾北高等学校	八尾市

語り部：小、中学校・高等学校等への出張講座（2）



2013年1月19日
「奈良県立榛生昇陽高等学校」

プロジェクトメンバーの母校で、福祉科の高校3年生35名を対象に授業を行いました。この高校生の中には、4月から関西福祉科学大学生になる生徒が5名もおり、休憩中には高校生たちとも話ができ、非常に和やかなものになりました。福祉科の高校生らしく、非常に活発なディスカッションでプロジェクトメンバーが脱帽していました。



2012年11月20日
「大阪府立貝塚高等学校」

【貝塚高等学校で授業を受けた高校生からの感想】

今日教えていただいて、これをまた自分たちが周りの人に伝えることで輪が広がっていくと思う。頑張ったり伝えるのはソーシャルワーカーの人だけではない。いつか日本全体に大きな地震が来るって聞くけど、来たら自分たちはどうなるんだろうって思った。

ソーシャルワーカーの人がいろんな職種の人とつながっているって知らなかった。

初めてソーシャルワーカーということを聞きました。どんなことをしているのか知らなかったけど、今日でよくわかりました。目立つ仕事じゃないけれど、必要でとても大切な仕事なんだとおもいました。

語り部：学会・研究会

年月日	行事	開催場所
2012年9月22日	ユース・ミーティング～阪神・淡路大震災記念人と防災未来センター	兵庫県神戸市
2012年11月28日	神戸市福祉職員新任研修会	兵庫県神戸市
2013年2月8日	大阪府社会福祉士会	堺市
2013年7月16日	日本社会福祉学会第61回秋季大会 特定課題セッション	札幌市



2012年11月28日
「神戸市福祉職員新任研修会」

神戸市福祉職員の新任研修会において発表しました。職員から災害時ソーシャルワーカーとして何を優先すべきか、医療的技術のないソーシャルワーカーの価値、市民が行政に対してどうあってほしいと思っているかなどが質問として出され、ディスカッションを行いました。

【　参加者の意見　】

災害時にソーシャルワーカーとして何をすべきかということを考えたことがありませんでした。しかし、みなさんの発表を聞いて、普段のソーシャルワークが危機的状況の中で生きてくることに気付かされました。

地域の交流や他機関との連携は、学生時代に思っていた以上に難しいですが、今回の発表の中でもあった“先を見越す必要性”から、普段の業務でより意識していかなければならないと思いました。

皆さんの活動は、現場で働くソーシャルワーカーにとって、とても励みになると思います。ぜひ活動の幅を広げ、より多くの人達にソーシャルワーカーの“声”を届けていただければ嬉しいです。

語り部：メディアへの情報提供（1）

（3）　第2495号　教育学術新聞　平成24年9月5日（水曜日）

知の拠点から
－継続支援－

先頃、「南海トラフ巨大地震の被害想定などが公表された。死者数は最大で三万人にものぼるという。首都直下型の巨大地震も懸念されている。日本において、自然災害は常態化しているといっても過言ではない。だからこそ自助・共助・公助の体制を万全にし、さらに「明日は我が身」と想像して、助け合いの精神を養う体制を築いていかなければならない。そのような中、東日本大震災復興支援に携わる大学の取り組みをいくつか紹介する。

福祉系大学経営者協議会（以下、「協議会」という。）は、福祉系大学の経営に携わる責任者が一堂に会し、社会福祉専門職の社会的地位の向上、社会福祉に関しての社会的認知の向上、日本の社会を支える社会福祉人材育成教育の発展等を推進することを目的に、平成二十二年六月に設立されました。

協議会においても東日本大震災に対する取り組みを行うべく、①福祉系大学の「人材育成」という福祉系大学のミッション、②福祉系大学が持つ「社会福祉に関する専門知識」、③「全国的な大学」が参画する全国的な組織力等、協議会の設立理念、加盟校の特徴を生かしたプロジェクトとすることを基本に検討を重ねてきました。

先の阪神淡路大震災から今回の震災まで、被災者や支援に関して「こころのケア」が一つのキーワードになってきました。

「こころのケア」は最重要課題の一つであることは間違いありませんが、被災者の暮らしに寄り添いながら具体的な取り組みの内容を吟味し、災害支援活動における問題点や課題を整理し、ソーシャルワーカーへの後方支援の体制を構築する。

②ソーシャルワーカーへの後方支援＝「ソーシャルワーカーの“声”プロジェクト」での聞き取り内容を吟味し、災害支援活動における問題点や課題を整理し、ソーシャルワーカーへの後方支援の体制を構築する。

③次代のソーシャルワーカーの育成＝ソーシャルワーカーとして災害支援を行う際に必要な知識や技術について理解し、講義やワークショップを通して、大規模災害・事故等で機能するソーシャルワーカーを育成する。

本プロジェクトを起点とした展開としては、以下のようなものが挙げられます。

①要保護者への直接支援（生活再建）課題を明らかにし、「学生」「語り部プロジェクト」にもり広く地域社会に伝えること。

②ソーシャルワーカーの機関、団体による直接支援に結びつける。

③学生、教員など大学等支援に関心のある人材の募集、災害支援活動に対する研修プログラムの企画・運営。

④災害ボランティアセンターの設置支援。

⑤災害ボランティアセンターの運営支援。

⑥災害ボランティアセンターの運営支援。

⑦災害ボランティアセンターの運営支援。

⑧災害ボランティアセンターの運営支援。

⑨災害ボランティアセンターの運営支援。

⑩災害ボランティアセンターの運営支援。

⑪災害ボランティアセンターの運営支援。

⑫災害ボランティアセンターの運営支援。

⑬災害ボランティアセンターの運営支援。

⑭災害ボランティアセンターの運営支援。

⑮災害ボランティアセンターの運営支援。

⑯災害ボランティアセンターの運営支援。

⑰災害ボランティアセンターの運営支援。

⑱災害ボランティアセンターの運営支援。

⑲災害ボランティアセンターの運営支援。

⑳災害ボランティアセンターの運営支援。

㉑災害ボランティアセンターの運営支援。

㉒災害ボランティアセンターの運営支援。

㉓災害ボランティアセンターの運営支援。

㉔災害ボランティアセンターの運営支援。

㉕災害ボランティアセンターの運営支援。

㉖災害ボランティアセンターの運営支援。

㉗災害ボランティアセンターの運営支援。

㉘災害ボランティアセンターの運営支援。

㉙災害ボランティアセンターの運営支援。

㉚災害ボランティアセンターの運営支援。

㉛災害ボランティアセンターの運営支援。

㉜災害ボランティアセンターの運営支援。

㉝災害ボランティアセンターの運営支援。

㉞災害ボランティアセンターの運営支援。

㉟災害ボランティアセンターの運営支援。

㊱災害ボランティアセンターの運営支援。

㊲災害ボランティアセンターの運営支援。

㊳災害ボランティアセンターの運営支援。

㊴災害ボランティアセンターの運営支援。

㊵災害ボランティアセンターの運営支援。

㊶災害ボランティアセンターの運営支援。

㊷災害ボランティアセンターの運営支援。

㊸災害ボランティアセンターの運営支援。

㊹災害ボランティアセンターの運営支援。

㊺災害ボランティアセンターの運営支援。

㊻災害ボランティアセンターの運営支援。

㊼災害ボランティアセンターの運営支援。

㊽災害ボランティアセンターの運営支援。

㊾災害ボランティアセンターの運営支援。

㊿災害ボランティアセンターの運営支援。

（1）災害ボランティアセンターの運営支援。

（2）災害ボランティアセンターの運営支援。

（3）災害ボランティアセンターの運営支援。

（4）災害ボランティアセンターの運営支援。

（5）災害ボランティアセンターの運営支援。

（6）災害ボランティアセンターの運営支援。

（7）災害ボランティアセンターの運営支援。

（8）災害ボランティアセンターの運営支援。

（9）災害ボランティアセンターの運営支援。

（10）災害ボランティアセンターの運営支援。

（11）災害ボランティアセンターの運営支援。

（12）災害ボランティアセンターの運営支援。

（13）災害ボランティアセンターの運営支援。

（14）災害ボランティアセンターの運営支援。

（15）災害ボランティアセンターの運営支援。

（16）災害ボランティアセンターの運営支援。

（17）災害ボランティアセンターの運営支援。

（18）災害ボランティアセンターの運営支援。

（19）災害ボランティアセンターの運営支援。

（20）災害ボランティアセンターの運営支援。

（21）災害ボランティアセンターの運営支援。

（22）災害ボランティアセンターの運営支援。

（23）災害ボランティアセンターの運営支援。

（24）災害ボランティアセンターの運営支援。

（25）災害ボランティアセンターの運営支援。

（26）災害ボランティアセンターの運営支援。

（27）災害ボランティアセンターの運営支援。

（28）災害ボランティアセンターの運営支援。

（29）災害ボランティアセンターの運営支援。

（30）災害ボランティアセンターの運営支援。

（31）災害ボランティアセンターの運営支援。

（32）災害ボランティアセンターの運営支援。

（33）災害ボランティアセンターの運営支援。

（34）災害ボランティアセンターの運営支援。

（35）災害ボランティアセンターの運営支援。

（36）災害ボランティアセンターの運営支援。

（37）災害ボランティアセンターの運営支援。

（38）災害ボランティアセンターの運営支援。

（39）災害ボランティアセンターの運営支援。

（40）災害ボランティアセンターの運営支援。

語り部：メディアへの情報提供（2）

424. 9. 29 朝刊　どに華

被災地の生活支援から学ぶ

被災地のソーシャルワーカー（左）に聞き取り調査を行う学生たち



大学の挑戦

関西福祉科学大（2）

ソーシャルワーカーの〝声〟プロジェクト

「どうかこれからも私たちを見放さないでください」

関西福祉科学大学社会福祉学部4年の原佐知子さん（22）は今春、宮城県気仙沼市の地域包括支援センターで出会ったソーシャルワーカーの女性の言葉がいまも頭に焼きついている。

同大が加盟する福祉系大学経営者協議会が企画したプロジェクトの一環で東日本大震災の被災地に赴き、現地のソーシャルワーカーから話を聞いたときのことだ。震災発生から1年以上が経過してなお復旧の途上にある被災地の現実を象徴するような言葉だった。

「現地で出会ったソーシャルワーカーの思いを記録するだけでなく、社会に発信する使命を感じた」と原さんは語る。

□■

この取り組みは「ソーシャルワーカーの〝声〟プロジェクト」。震災直後から社会福祉士らが被災者にどう寄り添い、生活再建をどんな形で支援したのかを調べるのが目的だ。学部内の募集に応じた社会福祉学部の3、4年生計8人が今年3月、約1週間にわたって津波の甚大な被害を受けた気仙沼市や石巻市などを訪れ、病院や地域包括支援センターを回って聞き取り調査を行った。

チームリーダーを務めた4年生の柴田城宣さん（21）は「多くのソーシャルワーカー自身が被災者でありながら、支援する側に回って活動を続ける姿に胸を打たれました。もしこんな状況に自分が置かれたら、どこまでサポートができるのだろうかと考えざるを得なかった」と振り返る。

□■

プロジェクトは学生の学ぶ意欲を高めるきっかけにもなったようだ。精神保健福祉士を目指す4年生の西岡なつみさん（21）は「被災地でのソーシャルワーカーの役割を知り、自分が進むべき目標が明確になった」、4年生の八木勇磨さん（21）は「この体験を現場実習でも生かしたい」と話す。同協議会の復興支援委員長として現地に同行した社会福祉学部の遠藤洋一准教授は「被災者のために何ができるかを自問し、無力感を抱きながら支援を続けたソーシャルワーカーの姿が学生たちの意識を劇的に変えてくれた」と評価する。

聞き取り調査の成果は報告集にまとめられ、関係機関に配布される。今夏には「多くのソーシャルワーカー自身が被災者でありながら、支援する側に回って活動を続ける姿に胸を打たれました。もしこんな状況に自分が置かれたら、どこまでサポートができるのだろうかと考えざるを得なかった」と振り返る。

□■

プロジェクトは学生の学ぶ意欲を高めるきっかけにもなったようだ。精神保健福祉士を目指す4年生の西岡なつみさん（21）は「被災地でのソーシャルワーカーの役割を知り、自分が進むべき目標が明確になった」、4年生の八木勇磨さん（21）は「この体験を現場実習でも生かしたい」と話す。同協議会の復興支援委員長として現地に同行した社会福祉学部の遠藤洋一准教授は「被災者のために何ができるかを自問し、無力感を抱きながら支援を続けたソーシャルワーカーの姿が学生たちの意識を劇的に変えてくれた」と評価する。

聞き取り調査の成果は報告集にまとめられ、関係機関に配布される。今夏には「これから数年間は活動を継続していきたい」（遠藤准教授）という。

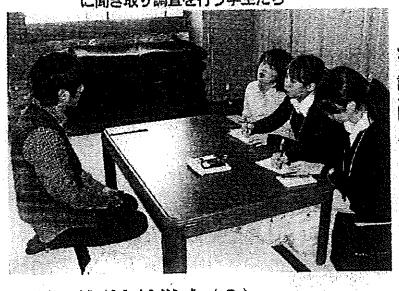
2012年9月29日　産経新聞

語り部：メディアへの情報提供（2）

424. 9. 29 朝刊　どに華

被災地の生活支援から学ぶ

被災地のソーシャルワーカー（左）に聞き取り調査を行う学生たち



大学の挑戦

関西福祉科学大（2）

ソーシャルワーカーの〝声〟プロジェクト

「どうかこれからも私たちを見放さないでください」

関西福祉科学大学社会福祉学部4年の原佐知子さん（22）は今春、宮城県気仙沼市の地域包括支援センターで出会ったソーシャルワーカーの女性の言葉がいまも頭に焼きついている。

同大が加盟する福祉系大学経営者協議会が企画したプロジェクトの一環で東日本大震災の被災地に赴き、現地のソーシャルワーカーから話を聞いたときのことだ。震災発生から1年以上が経過してなお復旧の途上にある被災地の現実を象徴するような言葉だった。

「現地で出会ったソーシャルワーカーの思いを記録するだけでなく、社会に発信する使命を感じた」と原さんは語る。

□■

この取り組みは「ソーシャルワーカーの〝声〟プロジェクト」。震災直後から社会福祉士らが被災者にどう寄り添い、生活再建をどんな形で支援したのかを調べるのが目的だ。学部内の募集に応じた社会福祉学部の3、4年生計8人が今年3月、約1週間にわたって津波の甚大な被害を受けた気仙沼市や石巻市などを訪れ、病院や地域包括支援センターを回って聞き取り調査を行った。

チームリーダーを務めた4年生の柴田城宣さん（21）は「多くのソーシャルワーカー自身が被災者でありながら、支援する側に回って活動を続ける姿に胸を打たれました。もしこんな状況に自分が置かれたら、どこまでサポートができるのだろうかと考えざるを得なかった」と振り返る。

□■

プロジェクトは学生の学ぶ意欲を高めるきっかけにもなったようだ。精神保健福祉士を目指す4年生の西岡なつみさん（21）は「被災地でのソーシャルワーカーの役割を知り、自分が進むべき目標が明確になった」、4年生の八木勇磨さん（21）は「この体験を現場実習でも生かしたい」と話す。同協議会の復興支援委員長として現地に同行した社会福祉学部の遠藤洋一准教授は「被災者のために何ができるかを自問し、無力感を抱きながら支援を続けたソーシャルワーカーの姿が学生たちの意識を劇的に変えてくれた」と評価する。

聞き取り調査の成果は報告集にまとめられ、関係機関に配布される。今夏には「これから数年間は活動を継続していきたい」（遠藤准教授）という。

2012年7月27日　神戸新聞

語り部：メディアへの情報提供（4）

震災の復興と備えへ 課題分析し情報発信を



被災地の継続的な支援などを話し合った講座＝豊中市

被災地巡回の関西福祉科学大生ら

東日本大震災からの復興支援を考える公民館講座が22日、豊中市の市立蛍池公民館で開かれ、ソーシャルワーカー（社会福祉士、精神保健福祉士＝国家資格）の活動などについて、被災地を訪れた大学生らが報告、継続してできる支援について討議した。

実践報告では、ソーシャルワーカーを目指す関西福祉科学大学（柏原市）社会福祉学科3年生、古根川和貴さんら学生3人が8月、岩手県の被災地を回って感じたことをリポートした。

3人は、被災者の「心のケア」から生活全般までを支援するソーシャルワーカーらに現地でインタビューもしており、「専門家自身も被災者で、いろいろな悩みを抱えているが、人と人をつなぐパイプ役になろうと前向きだ」などと指摘。その上で「何をすべきかのノウハウや問題点を次の災害時の活動に役立つよう記録、分析し、社会に情報発信したい」と強調した。

このほか、被災地で演奏活動をした和楽器演奏家の村下正幸さん（豊中市在住）が津軽三味線を演奏。最後に「継続してできる支援活動について」をテーマに全員で討議した。

2012年12月23日　産経新聞

29

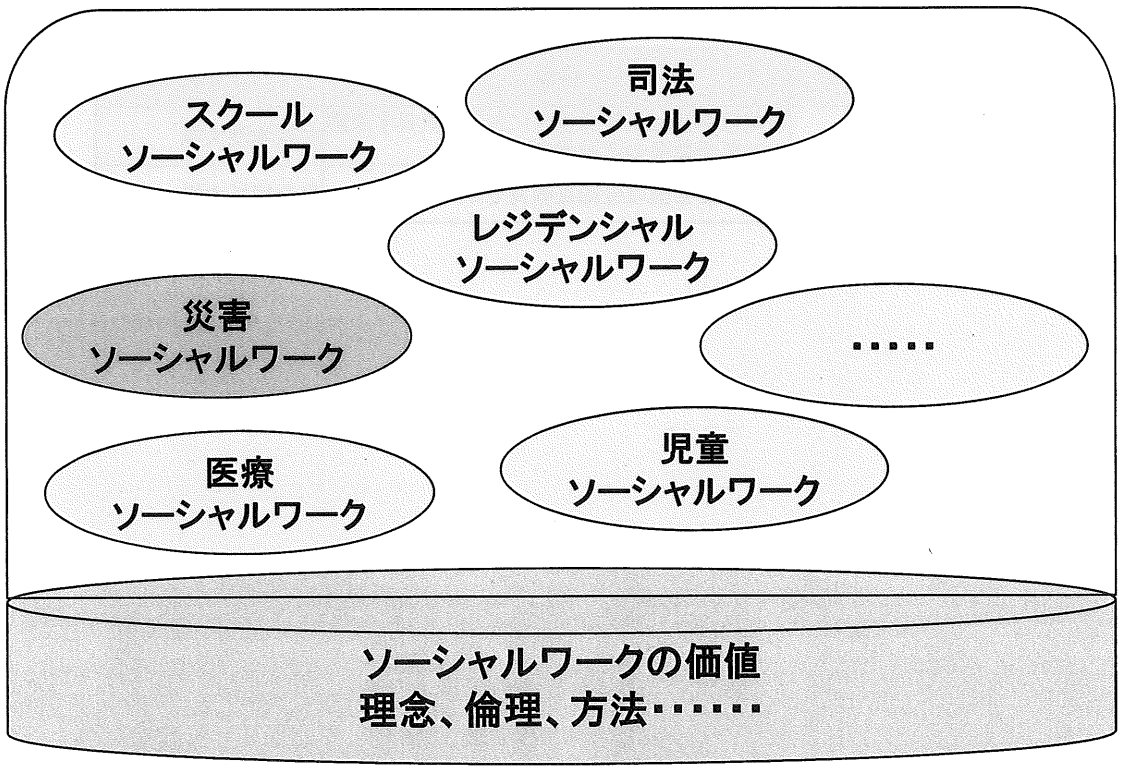
語り部：特別授業・講演会

年月日	行事	開催場所
2012 年3 月25 日	日本社会福祉系学会連合における東日本大震災対応委員会の活動報告	文京学院大学
2012年11月10日	2012年度全国社会福祉教育セミナー	東北福祉大学

30

大規模災害発生直後におけるソーシャルワーク機能に関する一考察

災害ソーシャルワーカーと位置付け



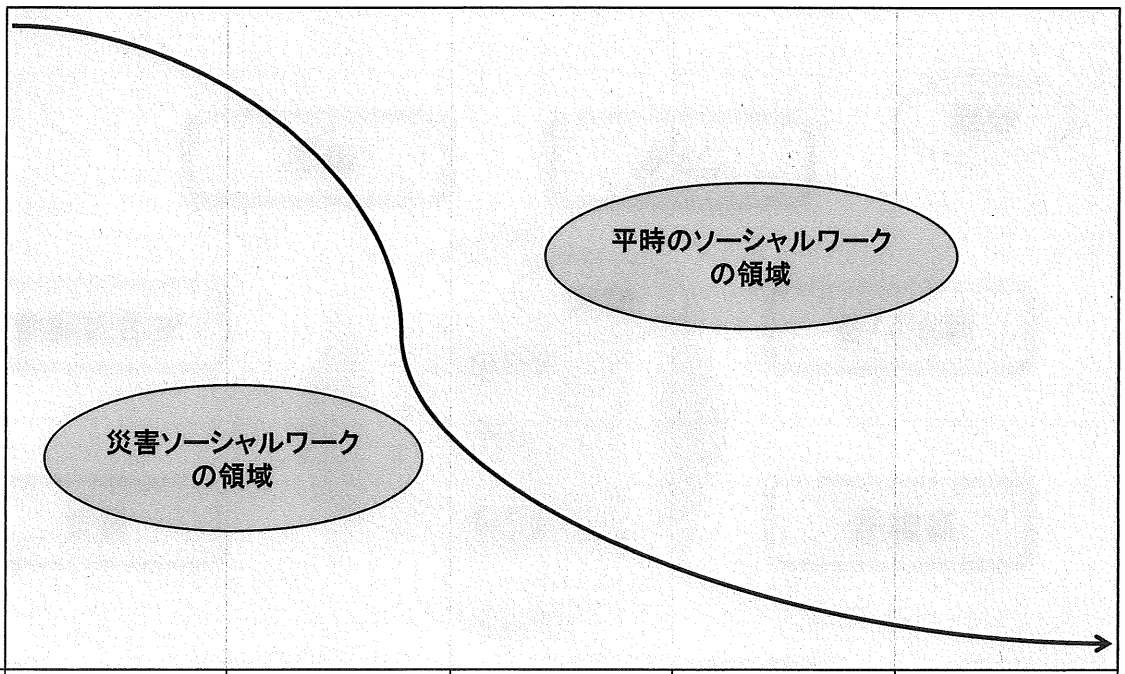
災害ソーシャルワーカーの展開

表 2.1　災害に想定される被災者ニーズの時系列変化に対応したソーシャルワークの内容・方法

期　時	災害以前	被災直後～１週間	～半年	～数年	～長期
想定される場面	地　域	救出・避難	避難所生活	仮設住宅生活	復興住宅生活・自宅再建
災害ソーシャルワークの内容	①防災への関心喚起の啓発活動 ②災害に備えた住民の学習支援 ③住民活動を支援する諸資源の情報提供・斡旋・仲介 ④災害弱者の把握（常時更新） ⑤地域組織づくり	①要援護者の安否確認・発見 ②発見した要援護者のサービスへの橋渡しとモニタリング ③葬儀の手配 ④必要物資の確保と供給 ⑤安全で衛生的な環境の保持 ⑥被災家屋等の片づけ・後始末（必要な物品の探索） ⑦①～⑥を手伝ってくれるボランティア・NPO 等（専門技術を持つ人も含む）の募集・確保・養成・配置・管理等のコーディネート全般 ⑧他支援組織や他専門職との連携、後方支援 ⑨生活・福祉相談窓口の設置と対応 ⑩被災を免れた専門機関・施設情報・専門職情報、また各種制度をはじめとする資源情報の収集や発信 ⑩生活保護や生活福祉資金の紹介・斡旋		①コミュニティ再構築 ②見守り体制の構築 ③サロンづくりやサークルづくり等を通じた孤立や、ひきこもり・廃用症候群の防止 ④様々な社会資源の紹介・情報提供	
災害ソーシャルワークで用いられる方法・機能	啓発・教育／組織化／ネットワーキング	アウトリーチ・ニーズキャッチ／アセスメント／プランニング／ネットワーキング／チームケア／コーディネート／資源開発／組織化／モニタリング／エンパワメント／アドボカシー／評価		アウトリーチ・ニーズキャッチ／アセスメント／プランニング／ネットワーキング／チームケア／コーディネート／資源開発／組織化／モニタリング／エンパワメント／アドボカシー／評価	
各段階における災害ソーシャルワークの特徴	予防的視点	緊急対応 救命／生命維持 外部からの応援（ソーシャルワーク版「D-MAT」）		生活再建 自立支援 自己実現 尊厳重視 ニーズ拡散・多様化へのきめ細かな対応	

川上富雄（2013）「災害ソーシャルワーカーの展開」『災害ソーシャルワーク入門』、中央法規

災害ソーシャルワーカーと平時のソーシャルワーク



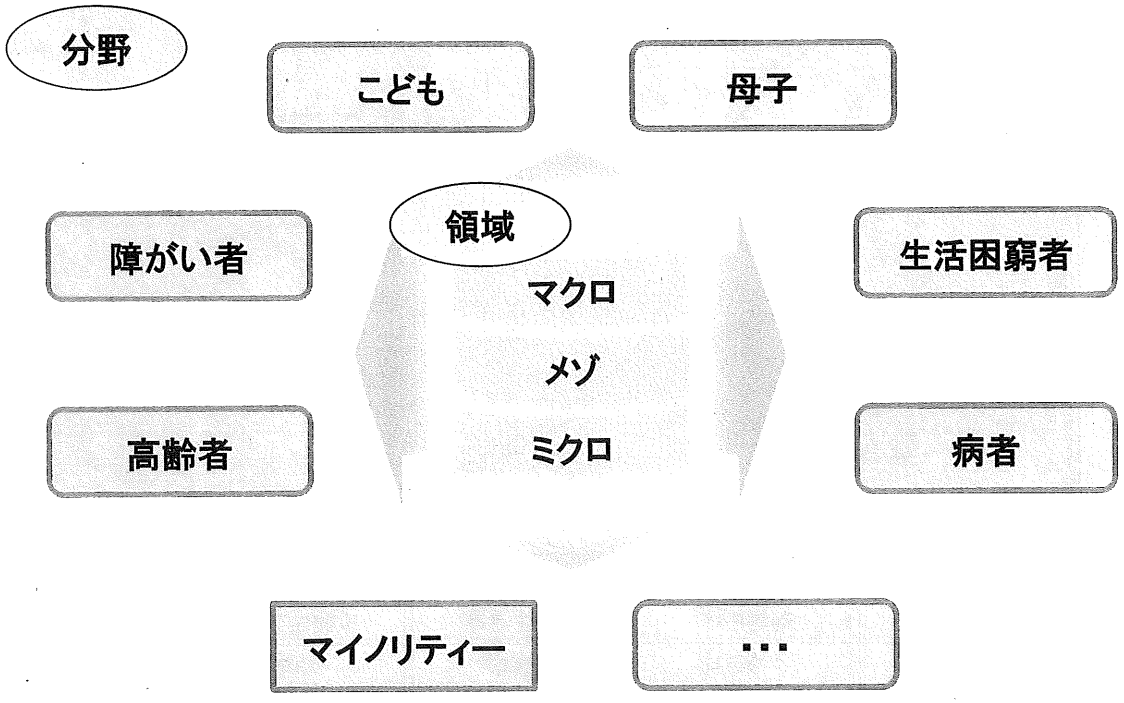
主な場面	災害現場	避難所等	仮設住宅等	復興住宅等	復興住宅等
時間軸	～1週間	～数カ月	～数年	～3年	～長期
フェーズ	救急救命期	緊急避難期	脱緊急期	生活再建期	復興期

災害発生直後のソーシャルワーカーの行動・想いに関するカテゴリ）

≪カテゴリ≫	＜サブカテゴリ＞
≪危機介入≫	1 安全の確保 2 被災者への直接的ケア 3 避難所での支援 4 安否確認
≪関係調整≫	1 地域住民との話し合い 2 避難所の環境調整 3 避難者摩擦への対応 4 関係機関との調整
≪状況へのアプローチ≫	1 状況の確認 2 生活がしづらい状況にある人への気づき 3 全体的に見ること
≪連携・協働≫	1 日頃からのつながり 2 地域の支え 3 携帯電話でのやり取り 4 仲間の存在 5 行政への不満 6 職能団体との連携 7 ボランティアへの対応
≪相談支援≫	1　情報収集 2　アセスメント 3　制度・資源の活用
≪自己犠牲≫	1　自宅に戻ったのは1週間後 2　無力感 3　行政としての責務と罪悪感

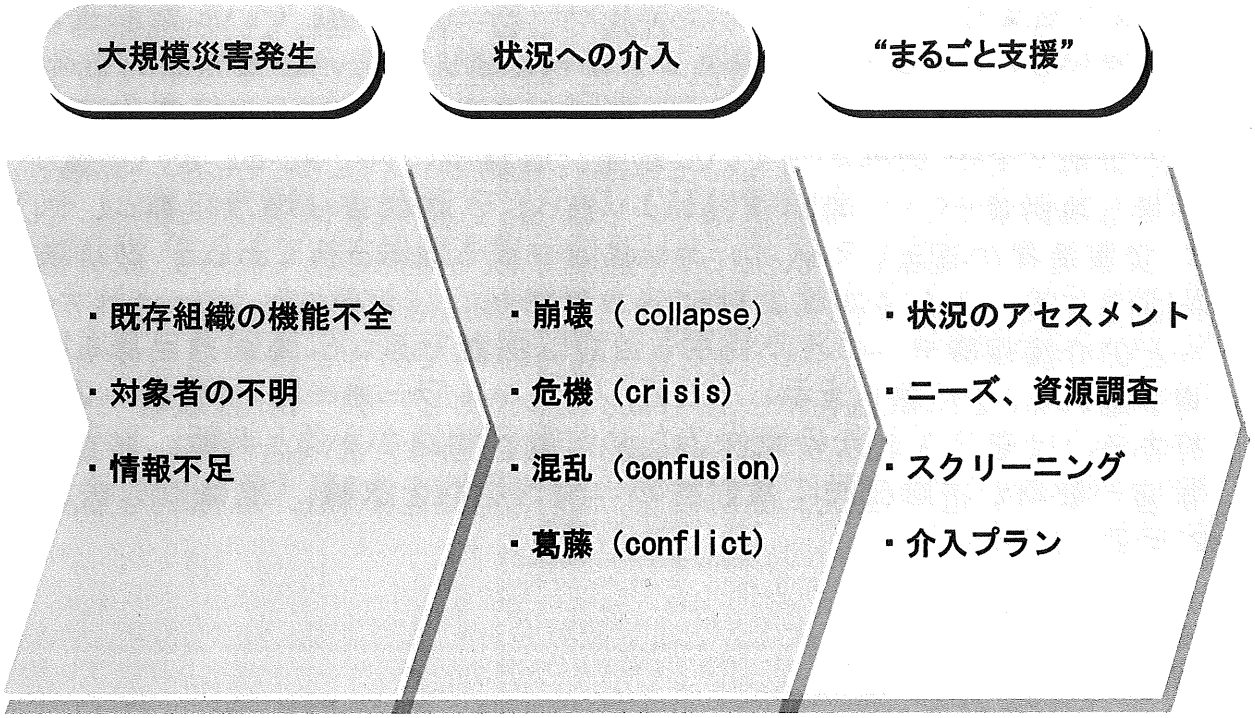
35

平時におけるソーシャルワークの枠組み



36

災害直後のソーシャルワーク機能に関する一考察



①崩壊（collapse）への介入

ある病院のソーシャルワーカーは,災害直後に同系列法人の特別養護老人ホームに応援に入った.当該ホームは津波により1階部分が浸水したため,階上で入所者をケアしていた.職員は限られた機材で介護度の高い高齢者をケアしており限界に達していたものの,何とかホーム内でケアを継続しようとしていた.状況をアセスメントしたソーシャルワーカーは,ホームでの支援継続は困難と判断し,法人理事者,自治体と連絡調整した上,県外施設の受け入れ先を探し,自衛隊のヘリコプターで入所者全員を移送した.つまり,「崩壊した状況」に介入し支援の可能性を評価するとともに,事実を把握し決定権者に伝えることによって適切な判断に導いた.

②危機（crisis）への介入

地域包括支援センターのソーシャルワーカーは,担当していた高齢者の安否確認をしながら瓦礫が散乱する地域を廻り,援助の必要な被災者を発見しようとしていた.津波で大きな被害が出たある地域では住民の大部分が避難する中,崩れかけていた家屋に避難所に行こうともしない介護が必要な高齢者がいた.高齢者はひとり暮らしで,近親者は遠方に暮らしていた.災害直後の混乱した状況にあり通信手段も確保されておらず,要介護高齢者を受け入れる福祉避難所は当該地域にはなかった.ショートステイなどの介護保険サービスの利用も当面は困難であった.高齢者自身も地域を離れることに抵抗を示したため,ソーシャルワーカーは,近親者への連絡あるいは受け入れ先の確保のために数日間はかかると判断し,比較的被害が軽微な近隣住民に高齢者の一時的避難を依頼し「危機的な状況」を回避しようとした.

39

③混乱（confusion）への介入

あるソーシャルワーカーが勤務する特別養護法人ホームは,地震,津波による直接的被害はなかったため,近隣に住む多数の被災者が避難してきた.ホーム側は空きスペースを開放し被災者を受け入れたが,職員や物資が充分に確保できていない中,入所者のケア,被災者の支援を同時に行わなければならず極度の「混乱状況」にあった.被災者は近隣住民が大多数であったため,地域ごとに民生委員,自治会役員などをリーダーとするグループに分け,定期的にリーダーと施設が協議する場を設けるなど,被災者と施設が共存できるシステムを構築した.

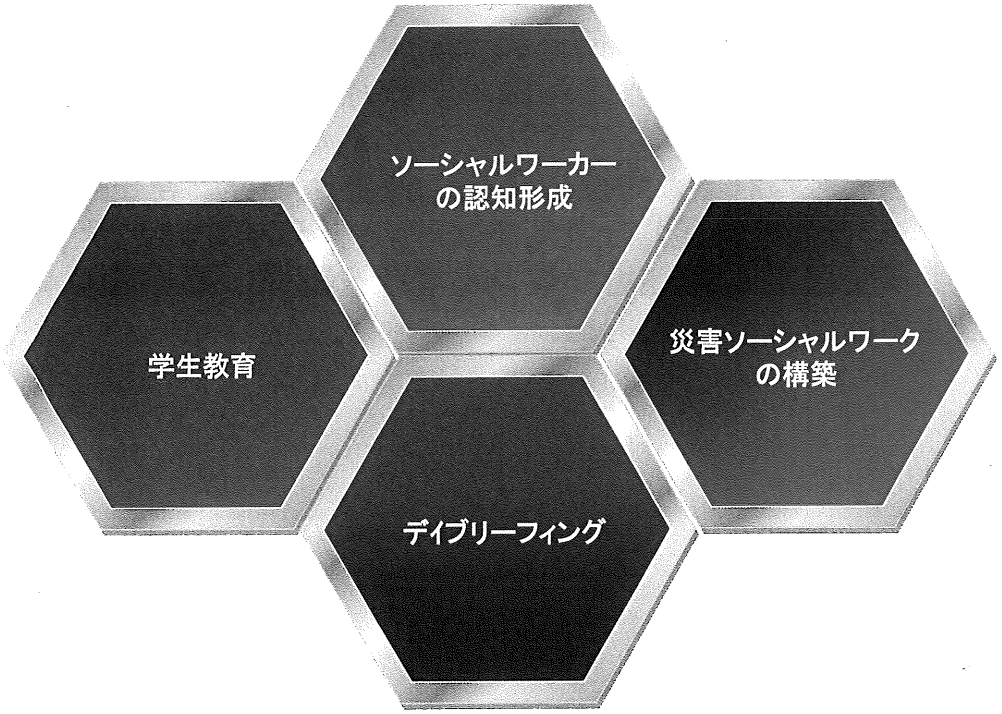
40

④葛藤（conflict）への介入

自治体に所属するソーシャルワーカーは,状況把握の上指定避難所に出向いたところ,認知症高齢者の行動が他の避難者を苛立たせ,当該高齢者を排除しようとする動きに見て取れた.また,避難者の中には精神疾患,知的障がい者と思われる人が複数存在し,避難所の非日常的な環境に適応できていない状況を確認した.そこでソーシャルワーカーは,デッドスペースを片づけ,一定程度の避難者が寝れる場所を確保し,要援護者の対応スペースとし「葛藤状況」を緩和した.

プロジェクトの評価と今後の課題

プロジェクトの意義



43

ソーシャルワーカーの認知形成

1年が経った今でも、まだまだ苦しんでいる人がたくさんいて、その中でソーシャルワーカーという人たちが被災者の方の為にできることをたくさんやっていてすごいな、と思った。私にも何か出来ることがあるはすだかた、考えて、やるべきだなと思った。(大阪府立金剛高等学校)

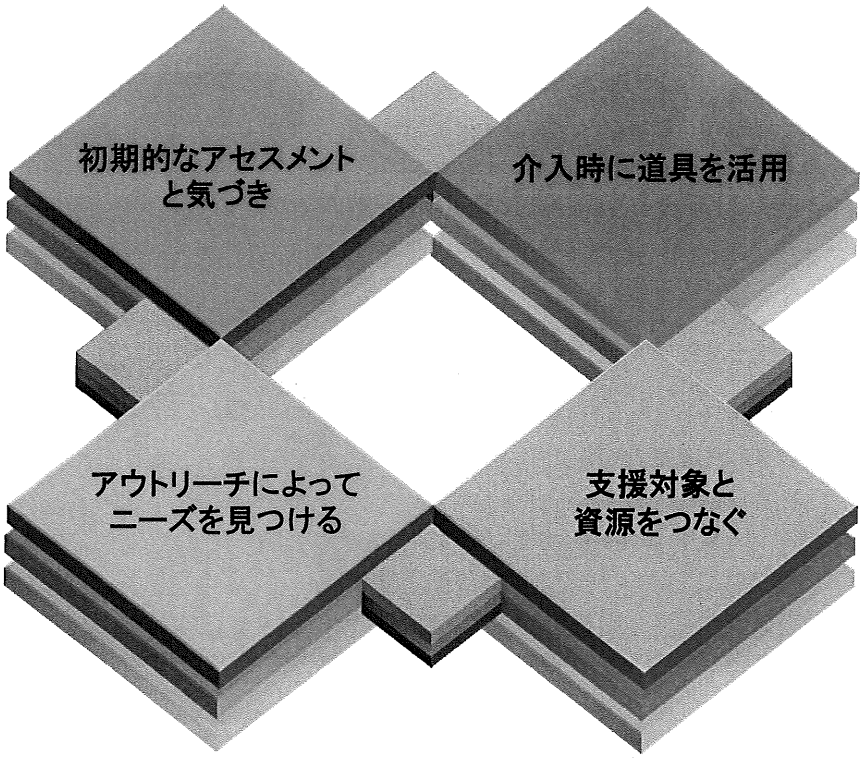
ソーシャルワーカーという存在を知りませんでした。今日の話をきいて、やってみたいと本気で思いました。自分は今何もできないけど、ソーシャルワーカーとして働きたいと思いました。(大阪府立金剛高等学校)

ソーシャルワーカーはまだまだその役割内容について一般的には認識されていません。今日、学生さんたちの活動報告で学生さんたちもその役割や重さを実感されたと思います。と、ともに私も大変勉強になりました。人と人とを繋げていくということはすべてを失った人にとって命をつなぐということでもあると思います。自分にできることをこれからも見つけたいと思います。(大阪府豊中市蛍池公民館)

44

災害ソーシャルワークの構築

【 災害ソーシャルワークの特徴 】



関西福祉科学大学4年生：
泉・植田・黒住・篠原・寺田
が作成

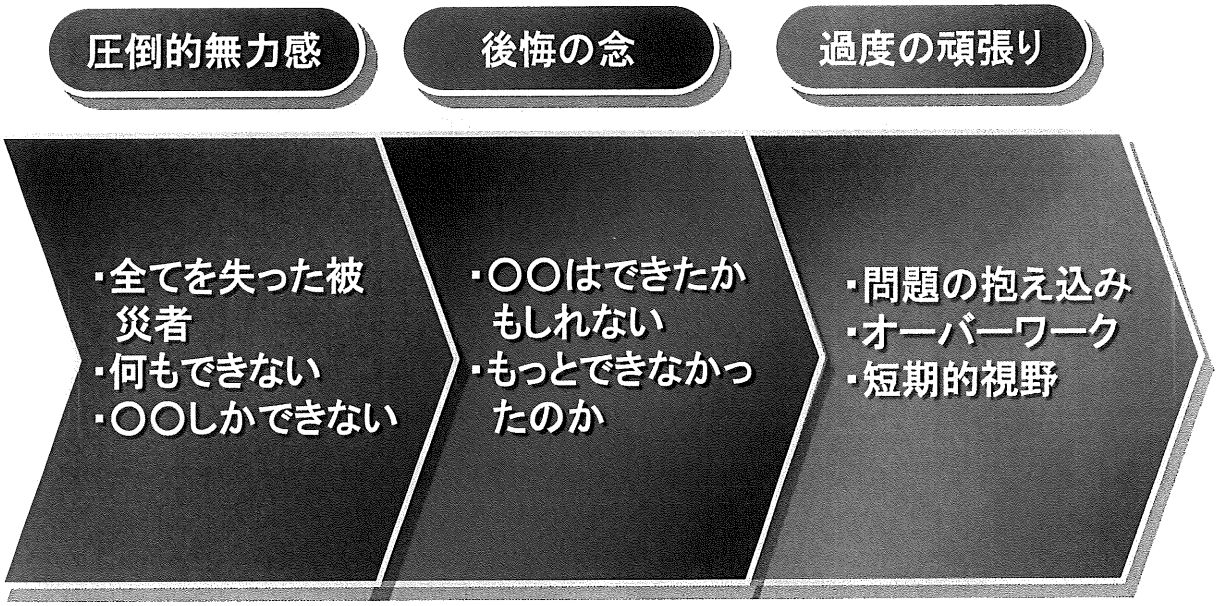
ディブリーフィング

当事者として、あるいは支援が進行中であることも含め、自分自身の振り返りやまとめもがまだまだできない状況にありましたので、本日皆様のご意見をお聞きしたり、学生さんの発表をお聞きすることは大変良い時間でした。気付きをたくさんいただきました。ありがとうございました。（3県社会福祉士会との意見交換会）

インタビューを受ける時、最初は面倒だと思いました。でも実際、ピュアな学生さんの姿に触れ、涙が出るぐらい嬉しかったです。自分自身の震災後の活動を振り返る貴重な体験だったと思います。（3県社会福祉士会との意見交換会）

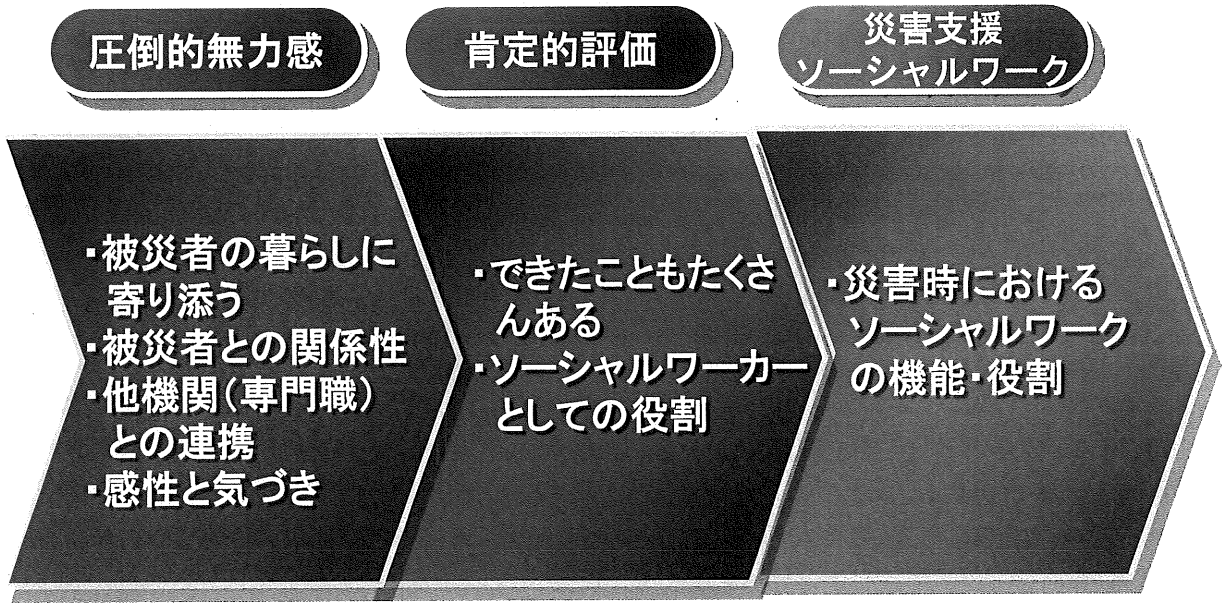
ソーシャルワーカーが“かっこいい”と思ってもらえて素直にうれしく思います。今回の震災で何があったのかを全国の仲間たちが見て聞いて、何を考えてくれるかが楽しみでもあります。学生の皆さんが考えて行っていくということの意味の大きさ　私も受け止めて“かっこいい”と言ってもらえるようなswを目指していきたいと思いました。皆さんと話ができた、皆さんから元気をもらえた仲間がここにいることも忘れないでくださいね。（3県社会福祉士会との意見交換会）

一つの共通した思い



47

私たちの視点



48

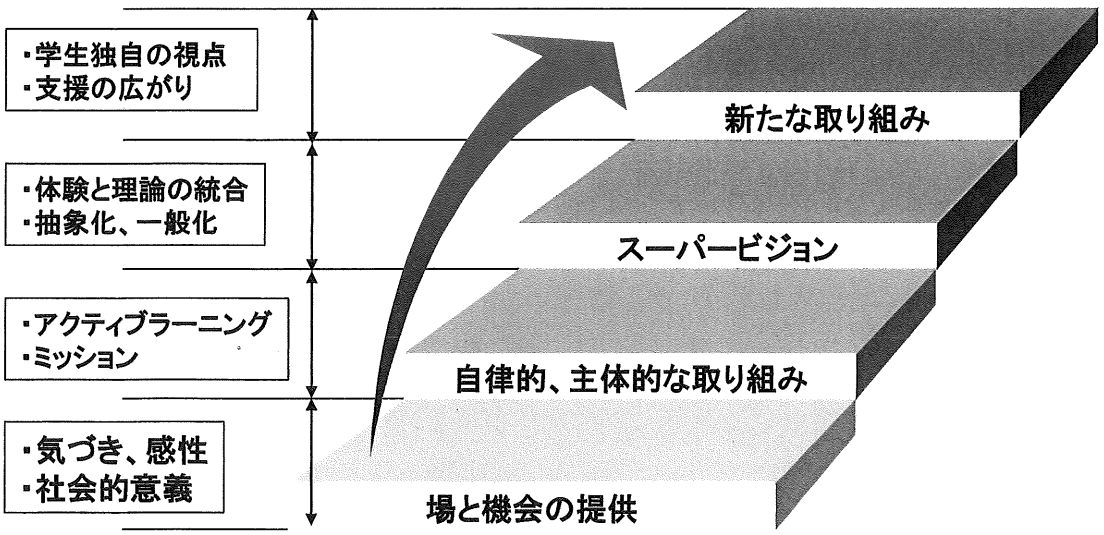
学生教育

＜災害に向き合う＞
今回の活動は自分にとって価値観が変わる出来事だった。これから福祉を勉強するものとして、一人の人間としてどう震災と向き合っていくのかを考えたい。

＜私たちに出来ること＞
私は被災地で活動したソーシャルワーカーの声を聴き、震災の中で何が起こったのかという事実と同時にどのような想いで支援を行ったのか伝えていくことが、学生の私に出来る被災地支援だと考えている。

＜ソーシャルワーカーの“想い”＞
「平時も災害時もワーカーの姿がテレビ等で見えない」と不思議に感じた。しかし現地では、よりその人らしい生活へとワーカー自身も喜びや困難を感じながらも向き合っている姿を伺った。現場の方とともにソーシャルワーカーの存在、役割、おもいを伝え、広めていきたい。

学びの場として



災害ソーシャルワークに関する課題

インタビューを通して、災害支援におけるソーシャルワーカーの機能、役割が一部見えてきた。

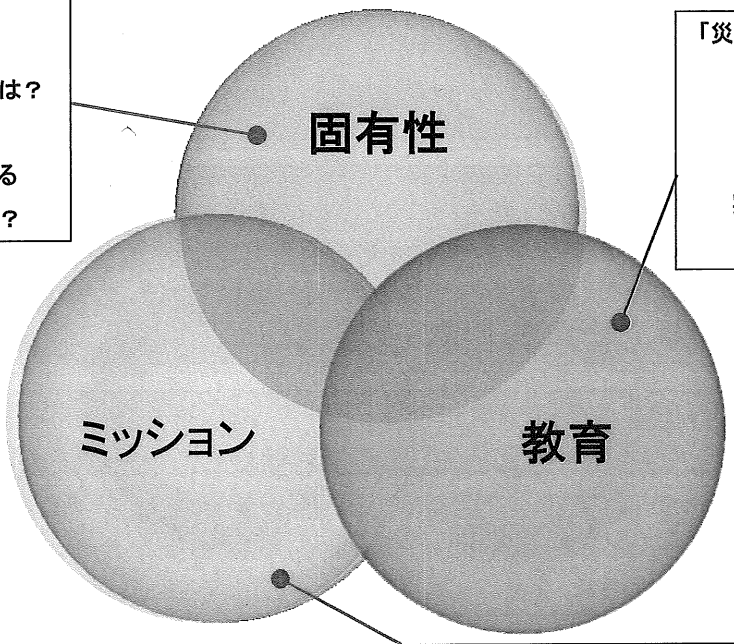
↓

ソーシャルワークの「固有性」は？

↓

非ソーシャルワーカーによる

ソーシャルワークの可能性？



「災害ソーシャルワーク」とは？

↓

テキスト、マニュアル

↓

実践教育のカリキュラム

現任訓練プログラム

発災直後から生活復興まで、一環したソーシャルワーク実践

↓

D－WAT等の議論も踏まえて

51

＜復興支援プロジェクトシンポジウム２０１４名古屋＞

岩手災害派遣ターゲットシステム

～「岩手県災害派遣福祉チーム」誕生までのあゆみ～

平　成２６年２月１７日
於）日本福祉大学
岩手県社会福祉士会相談役
（青山和敬荘施設長）
佐々木　裕彦

はじめに

１．発災時初動支援
　１）岩手県社会福祉士会初動支援
　２）青山和敬荘初動支援
　３）被災要介護高齢者等への対応

２．専門職能団体の組織化
　１）岩手災害人材派遣ターゲットシステム
　２）ＤＭＡＴ・ＤＷＡＴ連携モデル
　３）市町村地域包括支援センター支援モデル
　４）県社協ボランティアセンター支援モデル

３．災害派遣福祉チームの組織化
　１）組織化までの経緯
　２）職能団体からの県知事への要望
　３）災害派遣福祉チーム創設までの工程
　４）岩手災害支援ターゲットシステムの分析
　５）災害広域支援推進機構設置準備会
　６）災害広域支援有識者懇談会
　７）岩手県災害派遣福祉チームとは
　８）災害派遣広域支援の課題

４．日本福祉系大学経営者協議会の支援
　１）岩手県報告会での学び
　２）ナラティブアプローチの実践
　３）エンパワメントアプローチの実践
　４）自立（自律）支援

おわりに

＜略　歴＞　佐々木　裕　彦

HIROHIKO SASAKI

１９５７年　１月	岩手県出身
１９７９年　３月	東北福祉大学社会福祉学部卒業
１９７９年　４月	社会福祉法人岩手和敬会特別養護老人ホーム山岸和敬荘勤務
１９８５年　４月	痴呆性老人処遇技術研修担当指導者就任（厚生省）（～９２年）
１９９１年　５月	「社会福祉士」国家資格取得（第００６２２号）
１９９１年　６月	社団法人日本社会福祉士会会員（第７９号）
１９９２年　１月	山岸和敬荘援護部長就任（９６年総務部長就任）
１９９２年　４月	東北福祉大学大学院社会福祉学研究科入学（９４年社会福祉学修士第８０号）
１９９３年　５月	岩手県社会福祉士会事務局長就任（０６年社団法人～１３年相談役就任）
１９９５年　７月	社会福祉法人東北福祉会評議員就任（０９年理事就任）
１９９６年１０月	東北福祉大学兼任講師就任（０３年特任助教授０７年特任准教授改称）
１９９７年　６月	財団法人三田医学奨励会協議員就任（０３年移管）
１９９７年１０月	社会福祉法人岩手和敬会青山和敬荘施設長就任
１９９７年１０月	介護支援専門員養成指導者研修修了（厚生省）
１９９８年　４月	岩手看護専門学校非常勤講師就任
１９９８年　４月	盛岡市在宅介護支援センター運営協議会委員就任（～０５年）
１９９８年　６月	社会福祉法人岩手和敬会理事就任（９９年評議員就任）
１９９９年　１月	介護支援専門員資格取得（１０－０１８４号）
１９９９年１０月	盛岡市介護認定審査会委員就任（～１１年）
２０００年１１月	高齢者痴呆介護研究・研修仙台センター
	痴呆介護指導者研修カリキュラム作成委員会委員就任（～０１年）
２００１年　３月	盛岡市介護支援専門員協議会会長就任（～０８年顧問就任）
２００１年　４月	盛岡市医師会付属盛岡高等看護学院非常勤講師就任（～１１年）
２００１年　４月	盛岡大学短期大学部非常勤講師就任
２００１年　５月	岩手県介護支援専門員協会会長就任（～０８年顧問就任）
２００１年　６月	岩手県介護サービス事業者連絡会委員就任（～０８年）
２００１年　６月	岩手県障害者ケアマネジメント体制整備検討委員会委員就任（～０８年）
	（０２年障害者相談生活支援連絡調整会議０６年障害者自立支援協議会改称）
２００１年１０月	岩手県身体拘束ゼロ作戦推進会議委員就任（～０３年）
２００１年１０月	岩手県介護支援専門員支援会議委員就任（～０３年）
２００１年１０月	岩手県ケアプラン指導研修チーム就任（～０３年）
２００１年１１月	岩手県男女共同参画推進懇談会委員就任（０２年審議会改称～１１年）
２００２年　４月	岩手県立大学大学院非常勤講師就任
２００２年　４月	東北福祉大学大学院総合福祉学研究科博士課程入学（０５年単位取得修了）
２００２年　６月	岩手県障害者サービス事業者協議会委員就任（～０８年）
２００２年　７月	日本ケアマネジメント学会評議員就任（第４６３）（～０８年）
２００３年　４月	社会福祉法人岩手和敬会法人事務局長就任
２００３年　４月	岩手リハビリテーション懇話会幹事就任
２００３年１０月	県立社会福祉施設等あり方検討委員会委員就任（～０４年）
２００４年　３月	岩手県リハビリテーション協議会委員就任（～０９年）
２００６年　２月	盛岡市地域包括支援センター運営協議会委員及び
	盛岡市地域密着型サービス運営委員会委員就任（～０８年）
２００６年　４月	社団法人岩手県歯科医師会口腔保健センター事業運営委員就任（～８年）
２００６年１０月	盛岡市都市計画開発許可制度見直し懇話会委員就任（～０８年）
２００７年　６月	盛岡圏域地域ケア整備構想策定検討会委員就任（～０８年）
２００７年　６月	岩手県地域福祉支援計画策定委員会委員就任（～０８年）
２００７年　８月	岩手県高齢者虐待防止ネットワーク会議委員就任（～０８年）
２００７年１０月	岩手県介護給付適正化計画策定委員会委員就任（～０８年）
２００８年　４月	岩手県総合計画審議会委員就任（０８年部会長１２年副会長）
２０１２年１１月	岩手県社会福祉事業団総合企画委員就任

現　職　：
社会福祉法人岩手和敬会理事
社会福祉法人岩手和敬会法人事務局長
社会福祉法人岩手和敬会青山和敬荘施設長
社会福祉法人東北福祉会理事
社団法人岩手県社会福祉士会相談役
岩手県介護支援専門員協会顧問
東北福祉大学特任准教授
岩手県立大学大学院非常勤講師
盛岡大学短期大学部非常勤講師
岩手看護専門学校非常勤講師

はじめに

＜福祉は人なり人は福祉の命なり＞

社会事業の秘密兵器は何か
それは尊厳なる個人のパーソナリティが持つ
無限・未開発・未使用・未知の成長可能性である
速きこと（情報）
静かなること（分析）
侵略すること（機動力）
動かざること（信念）
何事に対処するにも時期・情勢に適応し
敏速に行動したり静止して状況の推移を見守ったりする
臨機応変のポイント

＜挑戦の法則＞

挑戦の先には成功か学びしかない
大きな挑戦の先には、大きな成功か学びしかない
失敗とは何もしないこと、行動しないこと

「岩手県社会福祉士会」初動支援（抜粋）

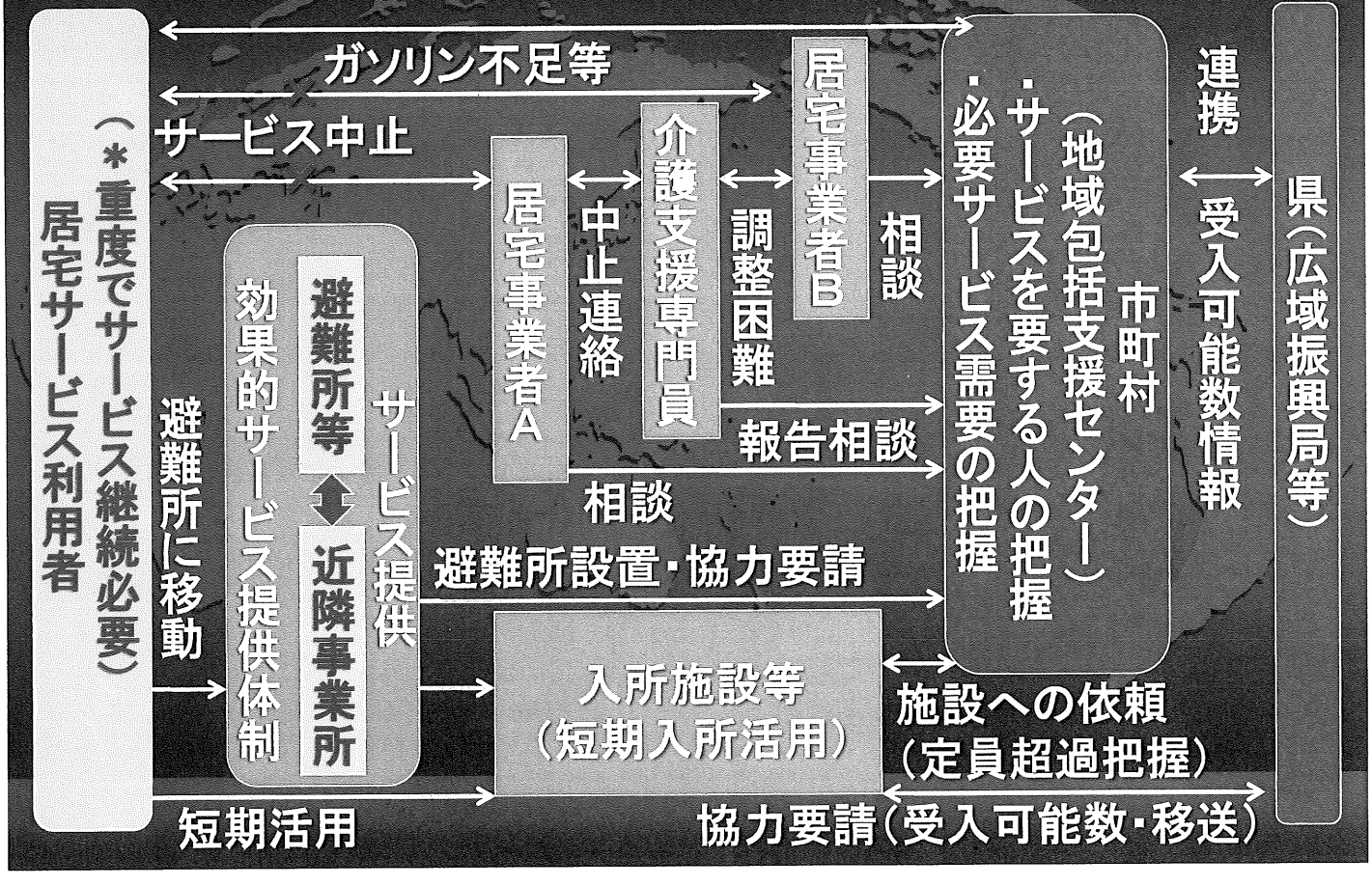
3／16	厚生労働省（本部より支援申入れ）
3／21	岩手県（第一次先遣隊、県との協議、県知事に支援申入れ）
3／24	県社協（支援の申し入れ、第1回職能団体検討会、Sモデル提案）
3／30	県社協（第2回職能団体検討会、災害支援システムの合意）
4／01	岩手県（県知事依頼、県庁1階県民室に相談員派遣、1か月）
4／05	被災地視察（第二次先遣隊、被災地会員との協議）
4／14	大槌町協議（地域包括支援センター支援申入れ）
4／20	県社協（第3回職能団体検討会、ニーズキャッチSモデル提案）
4／24	山田町（地域包括支援センター支援申入れ）
4／27	大槌町（地域包括支援センター支援開始、県予算・長寿財団事業）
4／30	被災地（第三次現地調整隊、陸前高田・大船渡・大槌）
5／01	被災地（第三次調整隊、宮古・山田、山田町包括支援開始）
5／02	岩手県（教育委員会に支援申入れ、学校ソーシャルワーカー派遣）
5／16	県社協（職能団体専門職人材派遣開始、陸前高田・大槌）
7／06	被災地（第四次調整隊、大槌・山田）＊9／20高田包括支援開始

「岩手和敬会」初動支援（抜粋）

＜青山和敬荘＞		＜山岸和敬荘＞	
3／11	在宅利用者安否確認 ・デイ：短期泊11 ・ヘルパー：短期泊4 ・地域住民泊：6 入家族2・短家族1 民委紹介1・成年2	3／11	在宅利用者安否確認 ・デイ：短期1
		15	・短期：大槌1
		19	・短期：大船渡1
		4／04	・短期：大船渡1
		07	・大船渡支援1（4日）
30	・大船渡支援：2（3日）	14	・短期：大槌1
31	・入所：宮古1＋1	25	・入所：大槌1（短期）
4／05	・入所：大槌2	5／09	・入所：山田1
07	・短期：山田1		包括8・CM4
29	・デイ：南三陸1		
5／10	・入所：大槌1（三陸園）		
11	・短期：花巻1（障害）		
14	・短期：釜石1		
	包括7・CM2・配食1		

被災要介護高齢者等への対応

～岩手県保健福祉部3／12、長寿社会課（2011．3．17）～



ジェネラリストソーシャルワークの視点

～エコシステム論：一般システム理論とエコロジカル理論の融合～

①点と面の融合 ②システム思考とエコシステム ③本人主体
④ストレングスパースペクティブ ⑤マルチシステム

「システム（併存・併置）」
全ての物象・事象はある種の
関係作用・連携で成り立つ

相互に作用する
要素の複合体

マクロ

「生態学的視点（適応）」
生活モデル
生活は環境との融和調和で成立
相互依存関係が生活実態を規定
交互作用の維持促進を重視
複合性理解し均衡調和目指す

閉鎖システム
開放システム

メゾ

「生活システム」
（4下位システム）
クライエント・ワーカー
ターゲット・アクション

ミクロ

個人　家族　集団　組織　地域　社会

岩手災害人材派遣ターゲットシステム

～専門職団体統合システム（2011．3．24県社協・Sモデル）～

領域統合　↑機能統合

職能団体等全国協会 → 組織化・派遣

（職能団体事務局）

その他　福祉士協　ヘルパー協　介護協　ケアマネ協 → 全国連携 コーディネート

長寿財団　岩手県　県社協 → 調査・予算化

機能＋崩壊＝±

（市町村）
地域包括支援センター
（地元コーディネーター）
（県外コーディネーター）

指示 調整

（社　協）
ボランティアセンター
（地元コーディネーター）
（県外コーディネーター）

→ 対策方針 → 団体連絡調整

地域支援　避難所支援　施設支援　その他支援 → 自助互助形成 コミュニティー

復興支援 → 構築・再生

DMAT・DWAT連携モデル概念図

～95年阪神大震災・01年厚生科学研究報告（DMAT）・05年誕生～

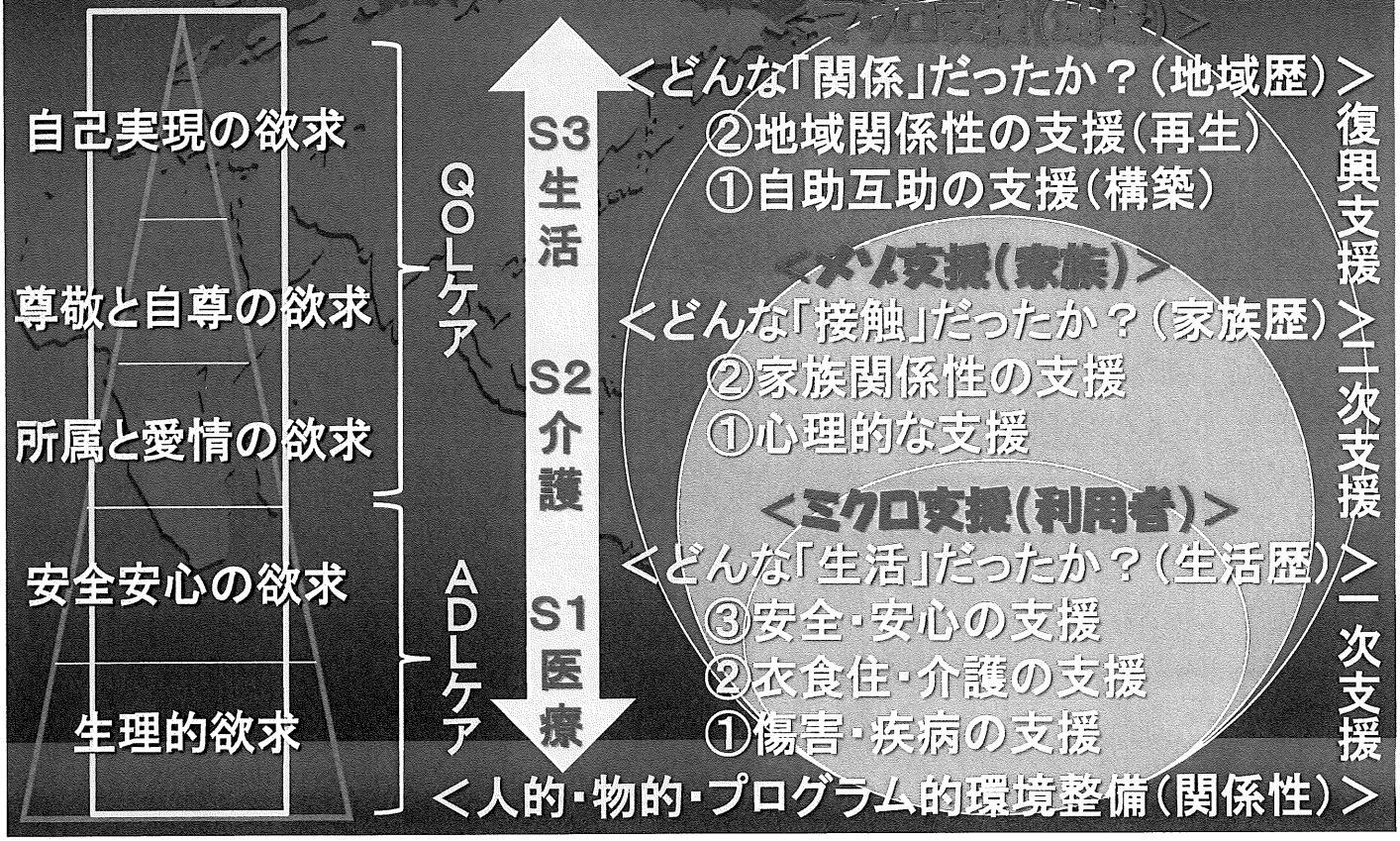
（岩手ターゲットシステム（DWAT）・2011．3．24・佐々木モデル）



災害時のステージ支援

～ミクロ・メゾ・マクロの重層的支援～

「連携」「協働」
災害ステージごとの
チームケアの必要性



災害対策本部・災害対策委員会

～社団法人岩手県社会福祉士会（2011．4．9・理事会）～

日本社会福祉士会（災害対策本部）
ボランティア名簿登録・派遣

派遣 ↕ 依頼

岩手県社会福祉士会（災害対策本部・委員会）

【地域包括支援センター支援】【学校ソーシャルワーク支援】【その他】
研修会・ホットライン・情報収集・コーディネート・予算化

ニーズ把握（情報収集）
ML：メーリングリスト

コーディネート（ニーズ分析）
本部：組織化・派遣調整

岩手県・県教委
（地域包括支援センター・学校）

依頼 ↓ 依頼

県社協・市町村教委
（ボランティアセンター学校）

情報集約

（内陸）→（ML：メーリングリスト）←（沿岸）

ブロック
（被災地相談員支援）
二戸・盛岡・中部胆江・両磐

ニーズ

ブロック
（被災地相談員配置）
久慈・沿岸・気仙

学校ソーシャルワーク

～スクールソーシャルワーカー（SSW）活用事業（08年度厚労省）～

①関係機関等と連携・調整するコーディネート
②児童生徒が置かれた環境の問題（家庭・友人関係等）に働きかける

【県市町村教育委員会】

学校
（校内体制づくり）
・チーム体制構築
・教職員サポート
・教職員研修等

スクールソーシャルワーカー
（SSW）教育と福祉の両面に専門的な知識・技術を有し過去に教育や福祉の分野で活動経験の実績等がある者

関係機関
・児童相談所
・福祉事務所
・保健医療機関
・適応指導教室
・警察
・家庭裁判所
・保護観察所等

環境への働きかけ

不登校　暴力行為
いじめ　児童虐待

友人　家庭
児童生徒
地域

（関係機関連携）
・ネットワーク構築
・関係機関調整
・情報行動連携等

【運営協議会】（課題提案等）　（成果報告等）

・教育委員会生徒指導主事・SSW・SSW配置校校長
・大学等研究機関（大学教授等）・関係機関担当者・PTA等

専門職ニーズキャッチシステム

～災害時支援アッセンブリー（2011．4．20県社協・Sモデル）～

派遣 ＜職能団体等全国協会＞ 依頼

＜職能団体事務局＞

介護　保険　障害？　福祉

ヘルパー協　介護協　ケアマネ協　その他　福祉士協

＜県社協＞

（岩手県福祉人材センター：職能団体アッセンブリー）

ニーズ分析・地域比較検討・サービス化・予算化

（岩手県ボランティアセンター）

＜ボランティアセンター＞

高田　大槌　山田　宮古　久慈

福祉相談所・避難所巡回・地域巡回・施設巡回等

（ニーズキャッチシステム）

医療ー保健ー介護ー福祉ーその他

Felt need・expressed need・normative need・comparative need

①行政②事業者③利用者④家族⑤地域⑥その他

専門職人材派遣日程表（団体調整表）

～災害時支援アッセンブリー（2011．4．20県社協・Sモデル）～

年月日	高田	大槌	山田	宮古	久慈	備考
5／1日	①氏名 ②	③ ④	⑤ ⑥	⑦ ⑧	⑨ ①	
2						
3						
4	② ③	④ ⑤	⑥ ⑦	⑧ ⑨	① ②	
5						
6						
7						

被災地「医療・福祉モデル」

～「地域包括ケアシステム」導入（2011．5．2政府案）～

医療・福祉モデル地区（岩手・宮城・福島の3県沿岸部）

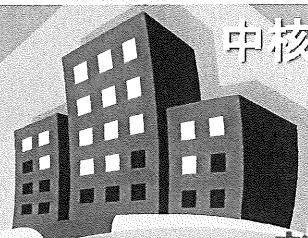
＜地域包括ケアシステムの本格導入＞

在宅介護・在宅医療充実
（24時間訪問介護・看護）

看護師
ホーム
ヘルパー



中核施設



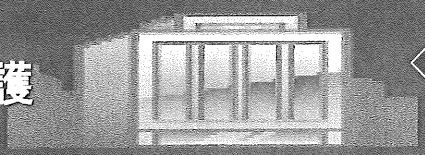


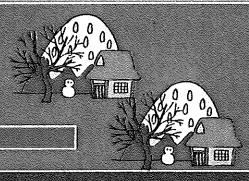
病院
診療所

老人福祉施設
（特別養護老人ホームなど）

（高台に建設・多層化など）

小規模多機能型
居宅介護
（短期の宿泊など）





岩手県まちづくり復興工程表（2011．5．12）

	2011年度	2012年度	2013年度	2014年度
	4月 → 3	4月 → 3	4月 → 3	4月 → 3
まちづくり	県市町村復興計画 → 事業計画案作成	事業決定	区画整理 集団移転	造成・かさ上げ・区画整理
			造成 用地取得	移転完了
住宅確保	仮設住宅建設	生活再建方法決定	公営住宅建設	10月
	仮設住宅入居（最長3．6年を要望）			生活再建完了

専門家派遣事業のスキーム

～福祉士会連携「国民生活センター」（2011．9．21消費者庁）～

政策対応

消費者庁

国民生活センター

ニーズ把握・要望
スキームの調整等

連携

協力要請

専門家の全国団体

弁護士会・税理士会
司法書士会・行政書士会
建築士会・土地家屋調査士会
社会保険労務士・社会福祉士会

自治体

協力要請　　協力要請

被災地の地域団体
A県○○会・A県○○会

被災地以外の地域団体
B県○○会・C県○○会

専門家を推薦　　専門家を推薦（被災地で確保困難）

消費者庁・国民生活センター（現地担当）・専門家委嘱

要望　　派遣

自治体

消費生活相談

生活再建等の総合的な相談

巡回等による身近な臨時相談

「災害派遣福祉チーム組織化」経緯

～第1回災害福祉介護広域支援有識者懇談会（2013．12．19）～

○（平成23年3月11日）東日本大震災津波発生
○（平成23年5月～）職能団体災害支援ボランティア派遣実施
○（平成24年3月23日）職能団体から県に対し要望書提出
○（平成24年6月～）災害派遣福祉チーム検討ワーキング会議開催
県から国に対し「災害派遣福祉チーム」制度化、
全国組織でチーム派遣調整するシステムの早急な構築を要望
（平成24年6月8日・11月21日）
知事名で厚労省あて要望
（平成24年8月22日・11月21日）
北海道東北地方知事会から民主党あて要望
（平成24年10月4日）
全国知事会から内閣府災害対策法制企画室あて要望
○（平成24年8月20日）厚労省「災害広域支援NW構築」事務連絡
「災害時における福祉・介護分野の広域的なネットワークについて」
（厚労省社会援護局福祉基盤課から各都道府県民生主管部局宛）

岩手「災害派遣福祉チーム」組織化要望

～県内職能団体等から県知事あて要望（2012．3．23抜粋）～

○要望事項

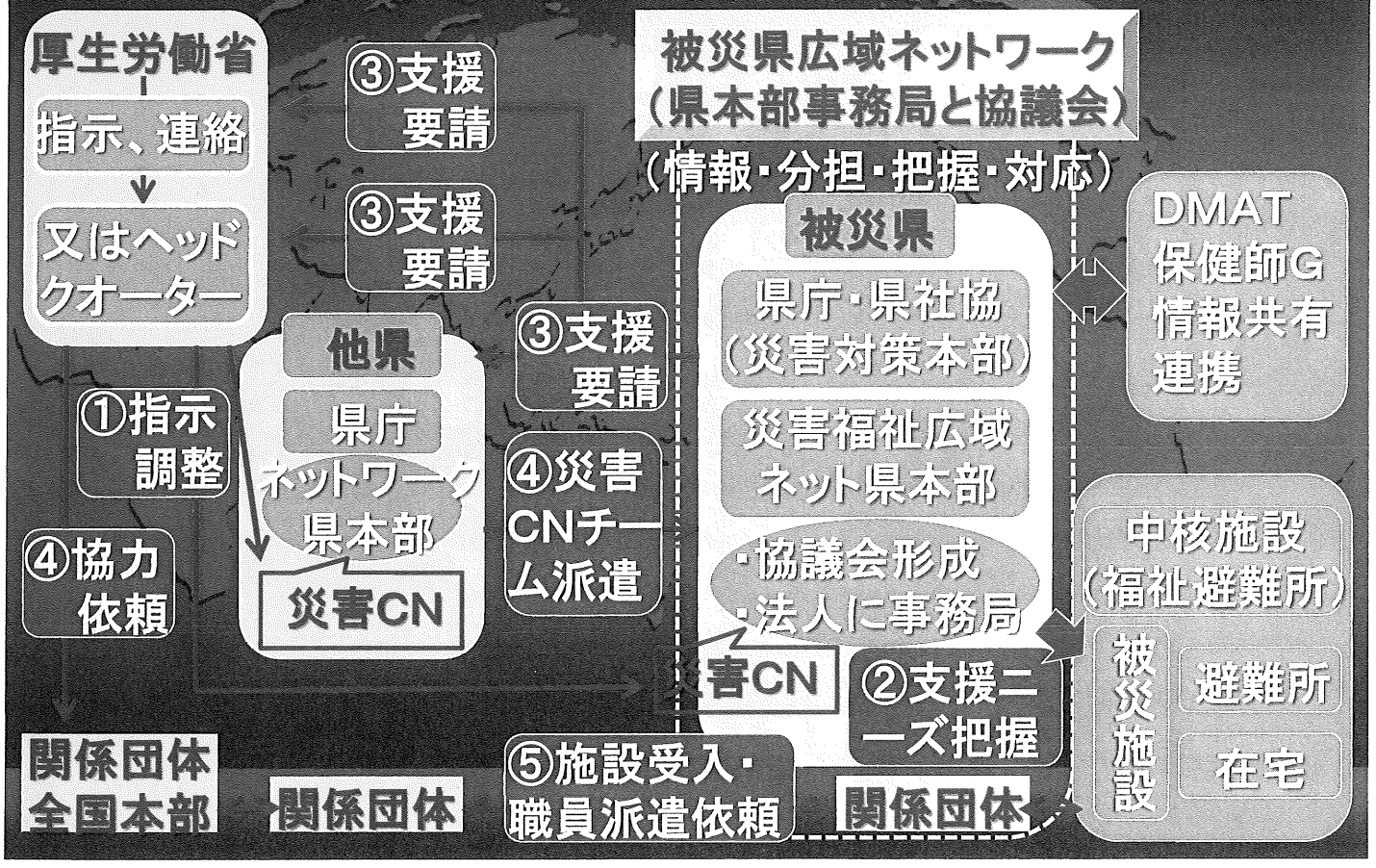
1　避難所や福祉避難所において、良好な避難環境を設定するコーディネートを行い、避難所運営の円滑化を図ることを担う災害派遣福祉チーム（DMATの福祉版をイメージ）を創設すること。
2　当該チームを派遣するシステムを全国組織として構築するため、県から国に働きかけをすること。

○要望事項

1　避難所で発生した課題等
・派遣制度ない・医療や他団体連携図れない・避難環境整備遅れ
2　課題を踏まえ、災害派遣福祉チームが担うべき活動内容
・現地情報把握と避難者への提供・医療保健行政連携で適切支援
3　災害派遣福祉チームの制度化に向けて
・チーム本部や講習訓練・権限責任明確化・行政要請が基本・講習訓練登録制・全国チーム数と応援態勢確保・災害救助費確保

災害福祉広域支援ネットワーク

～災害時福祉介護の広域支援ネットワーク（2012．8．20厚労省）～



岩手災害時福祉（介護）チーム創設

～第1回災害福祉介護広域支援有識者懇談会（2013．12．19）～

名　称	設置	構成	事務局	内容	H24	H25	H26
職能団体災害支援会議	H23.3	県職能団体等	県社協	組織化調整	――	――	――
福祉チーム組織化会議	H24.6	＋県立大等	県社協	分析創設検討	―― 月1回 ⇩	―― 継続	
福祉広域支援有識会議	H24.12	医保福学行政	県地域福祉課	本部在り方	反映 3回程		
広域支援ネットワーク県本部	H25年度	県社協 施設協 福祉団 医療団 DMAT 行政	県社協（想定）	在り方 仕組み 募集 研修 登録 資機材	⇩ 反映 構成員の選定	―― チーム編成 募集 訓練 検証	―― 反映 仕組検討 協議
福祉チーム検討部会							

岩手災害支援ターゲットシステムの学び

～日本社会福祉系学会連合報告書（2013年3月）～

1．避難所（学校等）

○地域で暮らす「障害者」の多さが知られていなかった
（地域で「社会の一員として」暮らしていたのか？）

2．福祉避難所（福祉施設等）

○一般住民も受け入れ、その後の対応に余裕がなかった
（福祉避難所の役割とは何か？）

3．在宅要援護者の避難場所（場所の不足等）

○避難所で不穏になり居場所を求め家族が連れ出した
○障害者が特養に入所せざるを得なかった
（在宅障害者への速やかな支援者は誰か？振り分けの仕組は？）

4．在宅要援護者への支援不足（支援の遅れ等）

○避難所や仮設住宅の支援が優先で在宅支援に遅れがあった
○地域生活移行で頑張ったが、施設入所の手続をしてしまった
（災害救助法は在宅障害者を想定しているのか？）

＊福祉は平時が前提で、社会資源崩壊時には人的支援体制が必要

災害広域支援設置準備会

～第1回「災害福祉広域支援推進機構」設置準備会（2013．6．7）～

平常時 本部組織のイメージ（大規模災害に備えた事前の準備）

岩手県災害福祉広域支援推進機構（仮称）
（災害福祉支援ネットワーク：本部長　知事）

市町村　各施設協議会　福祉職能団体　医師会　DMAD　保健師長会

県

災害福祉支援ネットワーク
県本部事務局（県社協）

職員名簿提出

協力団体（施設等）
協力団体（施設等）
協力団体（施設等）

＜活動環境整備＞
・行政・機関・団体協力体制構築
（防災計画位置付）
（協力協定締結等）
・チーム周知研修

・名簿取まとめ
・研修の実施
・チーム編成
・名簿県提出
・実地訓練実施

・名簿提出
・研修訓練派遣

広域圏・ブロックチーム　育成研修　実地訓練　資機材

福祉医療機構助成事業活用

チーム編成

チーム 4～6名　チーム 4～6名　チーム 4～6名

協力依頼（協定締結）

災害広域支援設置準備会

～第1回「災害福祉広域支援推進機構」設置準備会（2013．6．7）～

大規模災害発生時 本部組織のイメージ（チーム派遣スキーム）

岩手県災害福祉広域支援推進機構（仮称）
（災害福祉支援ネットワーク：本部長　知事）

＜県＞
①被災地の派遣要請受け（受けず）派遣判断
（現地情報収集）
⑥チーム派遣を決定

②確認
⑤報告
調整
⑦要請
⑩検討

＜県社協＞
④登録チーム員チーム決定
（組合わせ判断）
チーム編成
（経由又は直接）

③調整

チーム（チーム員）登録
チーム
チーム
チーム

⑦要請
⑧出動
⑨報告

チーム

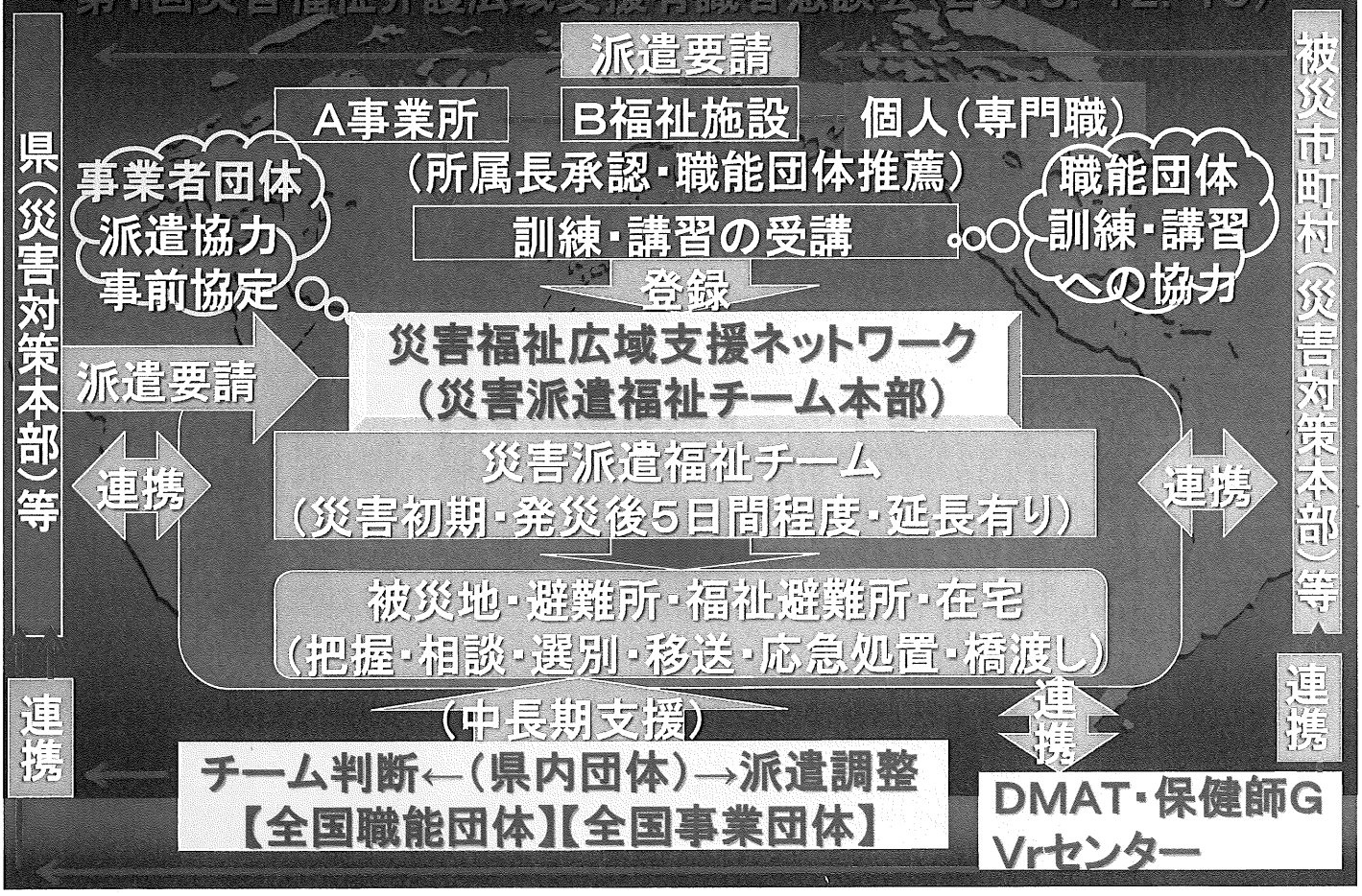
被災地

・派遣は県の責任で
・派遣軽費負担（旅費等）
＊災害救助法時は除く

・チーム派遣連絡調整
・必要な資機材調整
・活動の技術的判断

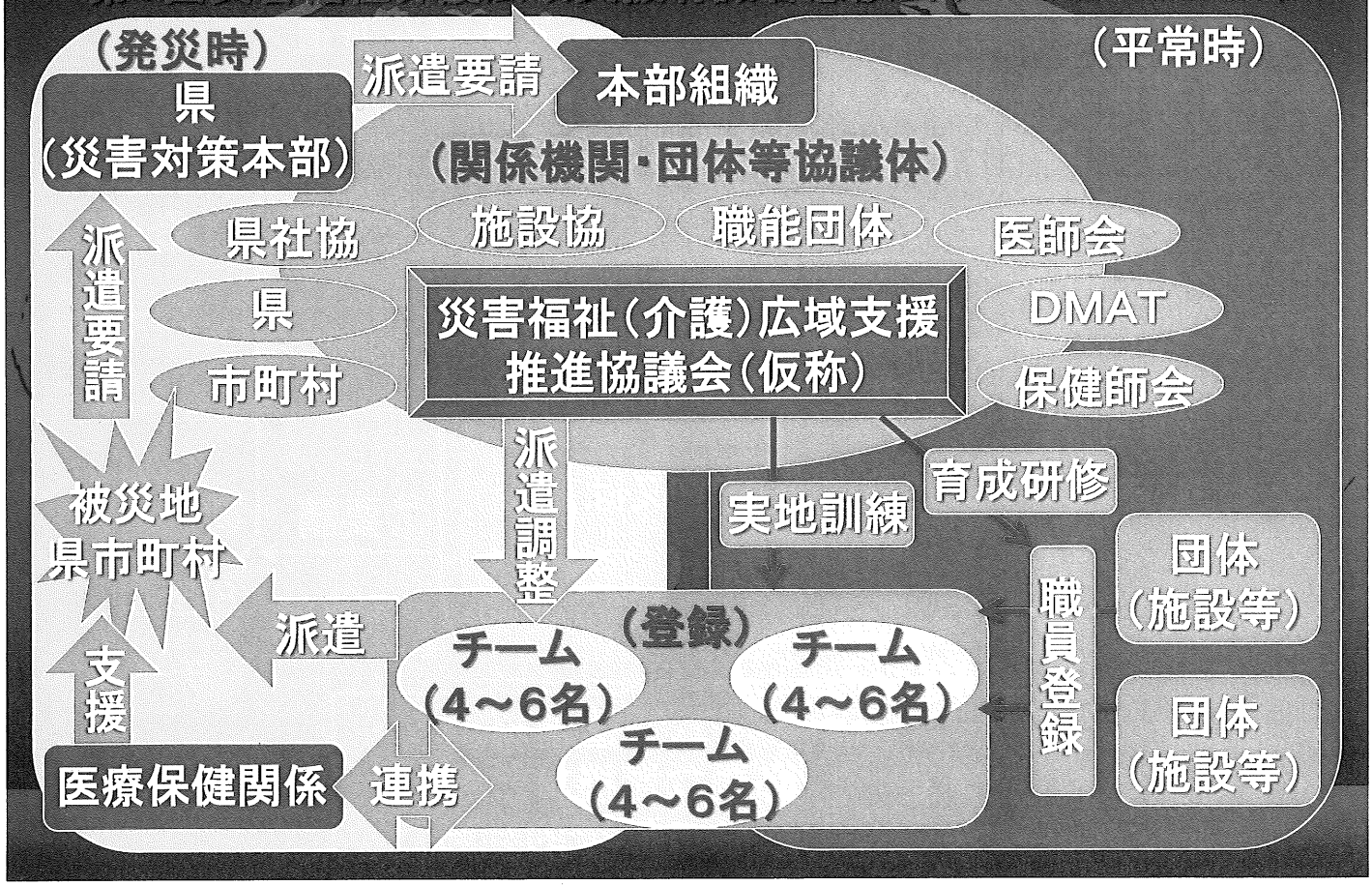
「岩手県災害派遣福祉チーム」の活動

～第1回災害福祉介護広域支援有識者懇談会（2013．12．19）～



災害広域支援「本部組織」のイメージ

～第1回災害福祉介護広域支援有識者懇談会（2013．12．19）～



ニーズ変化と医療・福祉の支援

～第1回災害福祉介護広域支援有識者懇談会（2013．12．19）～



「岩手県災害派遣福祉チーム」とは

～第1回災害福祉介護広域支援有識者懇談会（2013．12．19）～

1．岩手県災害派遣福祉チーム
- 大規模災害発生時（概ね災害救助法適用程度）福祉専門職チーム
  初期入り・5日間程度先遣隊・応急支援・中長期支援に引き継ぐ

2．チーム編成
- 社会福祉士・介護福祉士・精神保健福祉士・介護支援専門員・地域包括支援センター等の福祉専門職・1チーム4～6名程度を目安
- チームは以下の役割を担える者を本部が調整して組織・本部は構成員の中から、総括的機能、事務局機能を果たす者を指名できる

①要援護者スクリーニング・ニーズ把握・諸相談に応じられる者
②介護等の支援の他、避難所環境調整整備・福祉的視点での助言
③連絡調整・情報収集、中長期支援への橋渡し

3．派遣の流れ
- 派遣調整を行う本部組織を設置し、基本的には市町村要請で派遣

4．活動・その他
- 把握・相談・避難所環境整備・福祉避難所設置・移送・支援橋渡し
- 中長期は全国組織に要請・本部がニーズに合わせ人材を編成

災害福祉（介護）広域支援の課題

～第1回災害福祉介護広域支援有識者懇談会（2013．12．19）～

1　支援者多岐で、災害規模や市町村状況で支援程度の基準難しい
・ワーキング会議で検討中、マニュアルや研修等で一定程度の対応
2　派遣調整を主体に担う「本部」はどのような組織か
・ワーキングとは別に、医療保健含めた有識者懇談会を設置し検討
3　市町村や関係団体にチームを認知してもらい活動しやすい環境
・懇談会や県で検討、市町村に周知する啓発事業予算要求
4　派遣人材の確保と所属長の理解
・懇談会やワーキング会議で要検討
5　研修や訓練の方法、講師の確保
・ワーキング会議で国などから情報提供を得て検討
6　災害派遣福祉チームの活動費の確保
・県でチームの研修、実地訓練、派遣経費の予算を要求中、国の補助や災害救助法への位置づけなど、仕組みづくりを国に要求
7　災害派遣福祉チームを定着させる方法
・県でセミナー等の機会を活用し周知を図る、他県応援は国に要望

岩手災害支援ターゲットシステムの学び

～福祉系大学経営者協議会岩手報告会（2013年12月1日）～

1．初期的なアセスメントと気づき

○現場に行き「何が必要か・できるか」イメージして調査し、限られた情報で短時間に定期的評価を行い、ニーズに適した情報提供する

2．介入時に道具を活用

○介入時のきっかけ作りとして情報提供や物資補給等の道具を使いそのプロセスを通じ対象者のリスクを把握し援助の要否を判断する

3．アウトリーチによってニーズを見つける

○対象者が定まらない災害時は、積極的に現場に行き潜在的ニーズを探し出す、表出や認識できない場合はニーズを意識化できる

4．支援対象と資源とをつなぐ

○ニーズとサービスの接合にとどまらず、置かれている状況と生活上の困難を理解した上で、生活を予測し、必要な支援を展開する

＊個人の支援だけではなく、環境へのアプローチも重要

サービスを利用しやすいようにアセスメント視点を変える、サービスを利用者に合わせてマイナーチェンジする、福祉サービスではなかったものをサービスとして利用する、新たなサービスを構築する等

災害支援のソーシャルワーク機能

「Social Workers Involvement in Taiwans 1999 Earthquake Disaster Aid: Implications for Social Work Education」
Online Journal of Social Work and Society（Vol.1,C-C 2003年）

1. 個人と家族を支援：①障害者、子供、高齢者など脆弱グループに対し、情緒的支え、グループワーク、様々な活動への参加促進②避難所の家族への情緒的支え、葬儀や家族の一時的避難先準備の支援③家庭訪問④家族が犠牲者について語るインタビュー

2. 個人ニーズと資源調整・資源へのアクセス支援：①地方自治体、ボランティア団体橋渡し②ニーズとサービスの繋ぎ③脆弱な人々発見④要支援家族の発見と資源の繋ぎ⑤寄附金活動⑥物資供給⑦報告

3. 重篤な身体精神上の問題予防：①治療的介入（カウンセリング等）

4. 個人、家族、団体、地域の崩壊予防：①住宅、情報、支援の供給②パワーレスの軽減③グループ、機関、コミュニティの調整と組織化

5. 福祉向上のためのミクロ、マクロシステムの改善：①公的プログラム改善の代弁②ボランティアによるサービス開発③ニーズアセスメント④プログラムの改善⑤支援センター設置⑥地域力向上の福祉政策復興政策の改善⑦劣悪状況の構造的課題を改善するシステム開発

岩手災害支援ターゲットシステムの学び

～福祉系大学経営者協議会岩手報告会（2013年12月1日佐々木）～

＜マクロ＞○新たな仕組みづくりは人や金の流れが思い浮かぶ
○新たな関係性づくりは危機とともにあった

＜メゾ＞○組織・機関・人を構造化するターゲットシステムの特定必要
○予測できないニーズに対応する柔軟性の仕組みを準備する
ターゲットの中に答えを見いだすアセスメントが必要

＜ミクロ＞○社会システム崩壊時は構築してきた人間関係を思い出す
○SWの日常的視点である相互作用・交互作用の関係性である

○人間は緊急時には友人・仲間・知り合いの顔を思い出す
○安否確認したい・声を聞きたい・困りごとの力になりたいと思う
○そのために自分の経験と知識を総動員し身近な仲間と共同する
○同時に使えるターゲット資源を絞り込み連携図を描く
○連携図に人と金と道具を結びつけていく
○柔軟な連絡調整の仕組みや様式や手順を考え役割分担する
○寄り添いを実感できるフォローアップの体制を準備する

「ナラティブ」の基本概念

＜ナラティブセラピー（Narrative therapy）とは＞

○社会構成主義やポストモダンの影響を受けて練磨されつつある、
現代精神医学で用いられている精神療法の一つ
○治療者とクライエントの対等性を旨とし、
クライエントの自主性に任せて
自由に記憶を語らせることによって、
単なる症状の除去から人生観の転換に至るまで、
幅広い改善を起こさせることを目的とするもの
（PTSDやアダルトサヴァイヴァーの治療に広く用いられる）

＜語り直し（re-storying）＞

○既存の優勢な枠組み（dominant　story）に対して、
そこにおさまらないもの（unique　outcome）を見出し、
新しい枠組み（alternative　story）を生み出そうとする（語り直し）
○会話の参加者は協働してこれを創り上げていく、
セラピストは自分のdominant　storyを押し付けていないか
常にチェックが必要

「ナラティブ」の基本的な考え方

○私たちは人生を生きるとき、
自分たちの経験を「解釈」しながら生きているが、
何らかの枠組みがないと
自分の経験を意味づけることができない
○その枠組みが
自分についての「ナラティブ」である
従ってナラティブが変化すると
経験が変化し行動も変わることになる
○そのナラティブは
他者とのコミュニケーションを通じて
生まれ育てられる
○私たちが抱える「問題」も
コミュニケーションによって
生み出された意味として考えることができる
○ナラティブアプローチは
そこに働きかけようとする

ナラティブアプローチの展開過程

①ドミナント・ストーリーに傾聴する

クライエントが現在の問題・課題への意味づけを探求できるよう、ストーリーを傾聴し、無知の姿勢（not Knowing）をとる

②問題を外在化する

クライエントから問題を引き離し、その問題がこれまでの人生にどんな影響を与えてきたか客観視し、解決に向けてチャレンジする対象であることへの認識を促す

③影響的質問をする

問題・課題の維持に誰が関わってきたか、どんな出来事、経験が関与しているか、これまでのチェレンジの試み、人生にどのような影響を与えてきたか質問し、考えることを促進する

④ユニークな結果を見出していく

これまでのドミナント・ストーリーでは説明や意味づけができない出来事や結果を見出すように促す

⑤オルタナティブ・ストーリーを構築していく

これまでの出来事や経験に新しい意味づけを行い、新たなストーリーを、共同で構築していく

エンパワメントアプローチ実践

①**パートナーシップ形成**：権利を承認し独自性を尊重する・関係を作る
②**挑戦する状況を組織化する**：経験を承認し交互作用の範囲を考慮し目標を見据えることに応答して、挑戦する状況をアセスメントする
③**方向性を明確化する**：動機を確認し、関連諸資源への探索を導く関係づくりのための予備目的を決定する
④**ストレングスを特定する**：挑戦する状況、文化的独自性に対処し、逆境を乗り越えていくストレングスを探す
⑤**諸資源をアセスメントする**：家族関係、小集団、組織、地域の施設・機関等の社会環境との交互作用の中にある資源能力を探索する
⑥**解決への枠組みをつくる**：資源利用し、望む目標に導く計画を立てる
⑦**諸資源を活用し動員する**：可能な諸資源を動員し、計画を推進する
⑧**連携を作り出す**：サービス供給システム間の連携を創り出す
⑨**機会を拡大する**：開発、地域組織化等新しい機会と資源を開発する
⑩**成功を認識する**：達成を認識し継続行動を創る変化努力を評価する
⑪**成果を統合する**：成果を賞賛し、積極的変化を安定させ終結する

出典：DuBois,B.＆Miley,k.k.Social Work:An Empowering Profession（6th ed）Pearson Education,P.195,2008.

「自立支援」と「自律支援」

～「生活」の主体は誰か？それはより良く動機づけられた自分自身～

①自立支援とはADLを自分でできる状態に押し上げていく支援

②「できる」を「している」へ押し上げていく支援

③「生活」とは社会や集団に適応するために共に考え共に行動すること

ADLの実用性（自立の質5要素）

- 安全性
- 安定性
- 耐久性
- 速性
- 社会的容認性

自己効力感向上（自信向上が最も有効）

できる意識の認識促す

⑤認知症ケア終末ケアは家族介護者のケア

⑥達成可能水準内での成功反復体験を

簡単なレベルから段階的に難易度向上（継続は困難）

④目標の存在が重要

ADL向上が何につながるのか？

自分らしく描けないと継続は無理

イメージ・夢・目標を鮮やかに描ける支援

それが「自律支援」

仲間の中（生活）での役割（ADL）が重要

おわりに

＜組織文化（組織風土）＞

われわれの伝統は
伝統を打ち破ることをもって伝統としてきた

＜アイラ・チャレフ（Followership と行動原理）＞

（支持Follower）使命達成の強い責任感、行動原理や職業倫理厳守
創設者の想い支持、方向性を示し導く、強固な当事者意識
（5つの勇気）①責任担う勇気②役割果たす勇気③異議申立てる勇気
④改革に関わる勇気⑤良心に従い行動する勇気

＜ラインホルド・ニーバー＞

God grant me the serenity to accept the
things I cannot change,
the courage to change the things I can,
and, the wisdom to know the difference.

変えられないものを受け入れる心の静けさと
変えられるものを変える勇気を
そしてその両者を見分ける英知を我に与え給え

岩手 2013.1.18 朝日
（1） 総合 3版 （昭和12年1月18日第3種郵便物認可）

災害弱者の名簿作成

迅速避難へ義務付け

国の防災基本計画修正のポイント

- 市区町村は災害時に避難支援を必要とする高齢者や障害者らの名簿を作成する
- 原発事故に備え、甲状腺被ばくを防ぐ安定ヨウ素剤の配布体制を強化
- 原発から半径30キロ圏の「重点区域」では事故発生時、国が自治体に住民の避難場所や移動手段を確保するよう要請
- 伊豆大島の土石流災害を踏まえ、市区町村は避難指示・勧告を出す基準を明確にする

政府の中央防災会議（会長・安倍晋三首相）は17日、国の災害対応の基幹となる防災基本計画を修正し、高齢者や障害者ら災害弱者の名簿を作成し迅速な避難につなげることや、原発事故の対策強化を盛り込んだ。東日本大震災や東京電力福島第1原発事故の経験を基に、改正災害対策基本法と、原子力災害対策指針の改定を反映させた。

名簿作成は、今年4月から市区町村に義務付けられる。東日本大震災で多くの高齢者が逃げ遅れたことから、支援が必要な住民の氏名や住所、連絡先を名簿にまとめて町内会や民生委員などと共有し、避難時に役立てる。総務省消防庁の調査では、昨年4月時点で市区町村の3割弱が名簿をつくっていなかった。

原発事故対策では、甲状腺被ばくを防ぐ安定ヨウ素剤の住民への配布体制を強化する。原発から半径30キロ圏を「原子力災害対策重点区域」とし、事故発生時に国が自治体に住民の避難場所や移動手段の確保を求めるなどの手順を定めた。

首相は中央防災会議で「首都直下地震や南海トラフ地震は近い将来の発生が懸念され、わが国の社会、経済に深刻な影響を与えることが想定される」と指摘。その上で「大規模な災害時においても国民の生命と財産を守るため、引き続き緊張感を持って、防災対策に万全を期す」と述べた。

また防災基本計画は、昨年10月の伊豆大島（東京都大島町）の土石流災害を教訓に、市区町村が避難指示・勧告を出す基準を明確にすることを記載。国は判断材料となるガイドラインを見直す。自治体が大きな被害を受けて業務が停止した場合は、自治体管理の道路や港のがれき撤去などを国が代行し、輸送・救援ルートを復旧できるとした。

井戸水最高値270万ベクレル

福島第1海側、上昇続く

東京電力は17日、福島第1原発の海側にある観測用井戸で16日に採取した水から、ストロンチウム90などのベータ線を出す放射性物質が、過去最高値の1㍑当たり270万㍃検出されたと発表した。

同じ井戸でのこれまでの最高値は13日に採取した水の240万㍃。井戸は2号機の東側にあり、2011年の事故直後に極めて高濃度の汚染水が漏れたトレンチ（電源ケーブルなどが通る地下道）の近く。昨年12月26日採取が210万㍃、今月9日が220万㍃と、上昇傾向が続く。

海側では、汚染された地下水が海へ流出するのを防ぐため、ポンプで水を吸い上げており、東電は「吸い上げの影響で、汚染水が井戸の近くまで流れ込んでいる可能性がある」としている。

「復興加速へ政策総動員」

推進会議で首相

安倍晋三首相は17日、官邸で開いた東日本大震災の復興推進会議で「今年は各種事業が本格化し、重要な1年になる。政策を総動員し、復興をさらに加速させたい」と述べ、対策を強化する考えを示した。根本匠復興相は「復興が進むと新たな課題も出てくるので、一つ一つ解決していきたい」と述べた。

会議では、岩手、宮城両県で3月までにがれき処理が完了することなど、被災地の状況を政府が報告。用地取得を加速し、住宅やインフラ整備を着実に進めるとした。

南海トラフ想定 中四国合同訓練

9県が相互支援確認

中四国地方の9県は17日、南海トラフ巨大地震を想定した合同訓練を実施した。9県は東日本大震災後、被災した県を支援する相手をあらかじめ定めておく「カウンターパート制」を導入。訓練は、その実効性を確認するのが狙い。

9県は災害時の広域支援に関する協定を2012年に締結。鳥取と徳島、広島と愛媛など、組み合わせを決めた。

今回の訓練は制度の導入後初めてで、9県の職員約180人が参加。

16日午前8時に南海トラフを震源とする震度7の地震が発生、四国沿岸を中心に、津波や建物倒壊で、多数の死傷者や避難者が出たと想定した。



南海トラフ巨大地震を想定した中四国9県の合同訓練で、情報収集する中国各県の職員ら＝17日午前、鳥取県庁

26. 1. 18 朝日新聞

災害住宅応募半数割れ

市、希望者に呼び掛け

整備戸数の確定に反映

大船渡・仮申し込み状況(15日現在)

大船渡市は17日、15日現在の災害公営住宅の仮申し込み状況を発表した。申し込み対象734戸のうち、応募は48・2%の354戸にとどまっている。今回の仮申し込みで市は整備戸数の確定につなげる方針。高台移転団地造成工事も2014年度初めに全て着工予定で、住宅再建の枠組みが固まりつつある。被災者はどの手法を選ぶか決断の時期を迎えており、市は31日までの申し込みを呼び掛ける。

仮申し込みは13年12月20日にスタート。同年6月から7月にかけて実施したアンケート(回収率70・7%)では520人が災害公営住宅を希望しており、市は入居を希望していながら申し込みを済ませていない人が多くいるとみている。

中心部の大船渡町は、土地区画整理区域内で整備予定50戸中7戸の応募となったほかは全て、整備予定戸数を上回った。末崎の平林①、赤崎の大洞、三陸町越喜来の杉下でも申込率が100%を超えた。

いったん申し込んだ人も、31日までであれば、変更できる。2月中旬に申し込み状況を公表。変更を受け付け、3月上旬までに抽選を終え、中旬に結果を公表する。

市は申し込みが少ない地域の戸数を減らすなどのもりおか復興支援センターで開かれた。参加した内陸避難者ら約20人は、調理を通して交流を深めた。

市保健所職員や市食生活改善推進員ら6人が講師となり、お茶もちの作り方を指導。「焦げ目が付いた方が香ばしいよね」「これくらいかな」。参加者は会話を楽しみながら生地をこねたり、団子に焼き色を付けた。

同市仙北1丁目の中沢朝子さん(70)=宮古市築地出身=は「みんなで役割分担しながら作ることができて楽しかった。買って食べるよりおいしく感じる」と喜んでいた。

◇大船渡市内の災害公営住宅の入居仮申し込み状況

管理主体	地区名	建設場所または団地名	戸数 A	申込数 B	申込率 B／A
市	盛	宇津野沢	20	15	75.0%
		下舘下	53	23	43.4%
	大船渡	赤沢	23	25	108.7%
		上山東	11	19	172.7%
		田中東②	7	12	171.4%
		川原	29	35	120.7%
		区画整理地区	50	7	14.0%
	末崎	平林①	11	16	145.5%
		平林②	56	23	41.1%
		泊里	6	3	50.0%
	赤崎	沢田	20	4	20.0%
		後ノ入口	6	1	16.7%
		山洞	14	7	50.0%
		大洞	6	9	150.0%
		鍋ノ浦	14	7	50.0%
	猪川	長谷堂	53	31	58.5%
	立根	下欠	33	21	63.6%
	三陸町綾里	清水	30	19	63.3%
		所通	17	14	82.4%
	三陸町越喜来	杉下	6	10	166.7%
		崎浜	7	1	14.3%
	小計		472	302	64.0%
県	盛	みどり町	147	27	18.4%
	大船渡	上平	65	15	23.1%
	立根	関谷	50	10	20.0%
	小計		262	52	19.8%
合計(24団地)			734	354	48.2%

(1月15日現在)

会話を楽しみ岡お茶もち作り盛

内陸避難者ら講座

盛岡名物のおやつ「お茶もち」を作る講座は17日、盛岡市内丸

2016.3.7 河北新報

公営住宅遅れ45カ所

県工程表更新 2年延びる地区も

県は東日本大震災からの「復旧・復興ロードマップ（工程表）」を更新した。県内の災害公営住宅やまちづくり、防潮堤などの社会資本整備669カ所のうち、15%に当たる102カ所で、8月の前回更新時から完成時期が延びた。用地取得の難航や入札不調、資機材の不足などが要因。遅れるのは公営住宅が45カ所と多く、2年余延びる所も。住宅確保はなかなか加速の兆しが見えない。

完成時期が延びた公営住宅45カ所は戸数にすると1870戸で、全体の約3割。3カ月から半年ほどの遅れが多いが、最長の釜石市桑ノ浜地区は2年3カ月延びて2016年度末に。最も遅く完成するのは大槌町の町方地区と安渡地区で17年度前半となる見込みだ。

公営住宅は市町村が行った被災者の意向調査に基づいて計画戸数も見直し、前回から48戸減の6038戸（県整備2850戸、市町村整備3188戸）に修正。完成したのは3万3戸で、全体の5・3%にとどまる。

ロードマップは▽海岸▽まちづくり▽復興道路―など8分野において社会資本整備の工程を提示。年4回ほど更新しており、今回は12月末時点の見込みとしてまとめた。

公営住宅以外の分野でも、まちづくりが25カ所、防潮堤などの海岸保全施設も19カ所で完成時期が延びる。一方で、時期が早まる所も25カ所（まちづくり8カ所、公営住宅4カ所など）ある。

県復興局まちづくり再生課の遠藤昭人総括課長は「今回まとめた工程から遅れないよう、さらには少しでも前倒しができるように取り組みたい」と話す。

更新したロードマップは県ホームページで公表している。

◇完成時期が延びた災害公営住宅（県まとめ）

市町村	箇所名	戸数	完成時期
野田村	米田・南浜	6戸	14年度後半
田野畑村	羅賀R1	20戸	14年度後半
	島越S2	24戸	14年度半ば
宮古市	金浜	16戸	15年度後半
	重茂	4戸	14年度後半
山田町	豊間根	72戸	14年度前半
大槌町	屋敷前	151戸	14年度末
	大ケ口二丁目	23戸	14年度半ば
	柾内地区	31戸	(13戸)14年度後半 (18戸)16年度前半
	三枚堂	27戸	15年度前半
	町方	157戸	(52戸)15年度末 (38戸)16年度半ば (67戸)17年度前半
	吉里吉里	29戸	16年度後半
	赤浜	39戸	16年度後半
	浪板	15戸	(5戸)15年度後半 (10戸)16年度前半
	町方（寺野）	27戸	15年度前半 15年度後半
	安渡	41戸	(20戸)16年度前半 (21戸)17年度前半
釜石市	平田	126戸	13年度末
	野田	32戸	13年10月完成
	鵜住居	135戸	15年度末
	嬉石	100戸	15年度末
	東部地区	40戸	15年度前半
	室浜	19戸	15年度半ば
	根浜	18戸	15年度半ば
	桑ノ浜	16戸	16年度末
	松原	55戸	15年度末
	佐須	2戸	15年度半ば
大船渡市	上平	65戸	15年度前半
	長谷堂	53戸	14年度末
	綾里	30戸	14年度後半
	沢田	20戸	15年度半ば
	泊里	6戸	15年度末
	崎浜	7戸	15年度末
	上山	11戸	14年度前半
	赤沢	23戸	14年度前半
	平林	11戸	14年度前半
	宇津野沢団地	20戸	14年度前半
	蛸ノ浦団地	14戸	15年度前半
	所通	17戸	15年度後半
	山口	14戸	15年度後半
	川原	29戸	15年度前半
陸前高田市	中田	197戸	15年度前半
	柳沢前	28戸	14年度後半
	西下	40戸	14年度末
	大野	40戸	15年度半ば
	田端	20戸	15年度半ば
合計		1870戸	

（注）釜石市の野田は完成済みだが、前回の工程表で示された時期よりも遅れたため掲載。大槌町の町方など完成予定時期が複数ある箇所は、段階的に整備が行われる。

復興用地で特例案

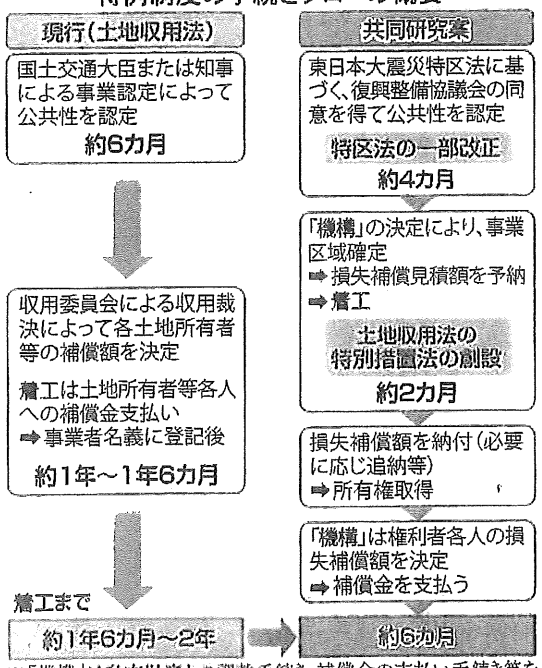
県と弁護士会

収用特措法まとめる

着工までの期間短縮

県は東日本大震災からの復興に向けた最大の課題となっている事業用地確保について、岩手弁護士会と共同研究してきた迅速化のための特例制度をまとめた。土地収用法の特別措置法の創設などで、着工までの期間を通常より1年～1年半短縮できるとしている。国に27日、特例制度創設を要望する予定で、被災地発の〝打開策〟に対する国の対応が注目される。

特例制度の手続きフローの概要



※「機構」は私有財産との調整手続き、補償金の支払い手続き等を担う、行政から独立性の高い第三者機関

あす国に創設要望

特例制度は、私有財産との調整手続きや補償金の支払い手続きなどを担う独立性の高い第三者機関（機構）を設置。現行の土地収用法では、収用委員会が裁決して地権者の補償額が決まり、補償金が支払われてからではないと着工できない。事業者が機構に補償見積額を予納すればできるようにする。

復興事業の用地取得の現状

県によると10月末現在、県内の復興事業用地の契約予定件数は約2万件（県約5千件、市町村約1万5千件）と膨大で、うち約4千件が相続未処理や多数共有などの懸案を抱える。市町村は権利者調査が十分に進んでおらず、懸案件数は大幅に増えることが確実視される。

土地収用手続きの前段階として必要な事業の公共性の認定は、現行は国や県が担っているが、既存の市町村復興整備協議会の同意で可能とする。

通常なら全体で1年半から2年ほどかかっていた着工までの期間を半年に短縮できるとしている。

本県被災地では相続未処理や多数の共有者からなる土地が多くあり、復興用地の取得が進んでいない。国も手続きの簡素化など一定の措置は講じているが現行制度内の対応にとどまっている。

県は6月、特例制度を検討するワーキンググループを設置。8月から同弁護士会と共同研究を始め、憲法29条の「財産権の保障」に抵触しないよう留意し最大限早く着工できる制度を検討してきた。

同弁護士会の東日本大震災災害対策本部長を務める石橋乙秀弁護士は「千年に一度の大震災で悠長なことは言っていられない。私有財産の保障について柔軟に考えるべきだ」と強調。「本県沿岸は土地の権利関係がきっちりしておらず、確定にとてつもない時間がかかる。（国は）被災地の特殊事情を理解してほしい」と訴える。

27日に関係省庁や各政党を回る達増知事は「用地確保は復興加速のポイント。被災県から政策を発信したい」としている。

（第3種郵便物認可）　26.11.26　岩手日

がれき処理率82.7%

県第8回復興統計　人口減少止まらず

県は25日、東日本大震災の復旧・復興状況を四半期ごとに統計値で示す「いわて復興インデックス」の第8回分を公表した。10月末時点のがれき処理率は82・7％（前回比20・4㌽増）と、本年度内の完了に向け着実に処理が進む。一方、人口減少が進行しており、人口流出を防ぐためにも迅速なまちづくりが求められる。

【安全】がれき推計525万㌧のうち、10月末時点で434万㌧を処理した。この3カ月間で100万㌧余を処理し、進行率は20・4㌽上昇。県外自治体による不燃物の受け入れが進んだ。

【暮らし】沿岸12市町村の10月1日時点の人口は、震災前（2011年3月1日時点）と比べ7・4％減の25万2780人。減少傾向は続くが、減少幅は震災前と同水準にまで戻っている。

9月の沿岸部の有効求人倍率は前回（6月）と比べ0・26㌽増の1・53倍。7～9月の新設住宅の着工戸数は1077戸と高水準を維持している。

【なりわい（産業）】産地魚市場の4～9月の水揚げ量は4万7443㌧。秋サケ漁が回復するなどし、前年同期を21・5％上回った。7～9月の県内主要観光地14カ所の入り込み客数は169万8107人。前年同期比4・3％減となったが、震災前の10年の同期比では14・9％増となっている。「あまちゃん」効果で久慈市のやませ土風館は大きく増加した。

いわて復興インデックス（8回目）の主な項目

	項目	現状	前回（9月公表）
安全	がれき処理の進行率	推計量525万㌧に対し処理434万㌧で進行率82・7%（10月末）	処理327万㌧で進行率62・3%（7月末）
安全	地表付近の放射線量（一関市）	毎時0・10㍃シーベルト（10月）	毎時0・10㍃シーベルト（7月）
暮らし	人口総数	25万2780人で震災前比−7・4%（10月1日）	25万3162人で同−7・2%（7月1日）
暮らし	新設住宅着工戸数	1077戸で前年同期比+85・1%（7～9月）	739戸で同+8・2%（4～6月）
暮らし	応急仮設住宅入居戸数（遠野市、住田町を含む）	1万2017戸でピーク時の1万3218戸から−9・1%（10月末）	1万2352戸で同−6・6%（7月末）
暮らし	有効求人倍率（原数値）	1・53倍で前回比+0・26㌽（9月）	1・27倍で同+0・13㌽（6月）
暮らし	ボランティア活動人数	1万3805人で前年同期比−64・9%（7～9月）	1万260人で同−71・5%（4～6月）
なりわい（産業）	補助事業での新規登録漁船数（累計）	13年度までの整備目標6800隻に対し6107隻で整備率89・8%（11年4月～13年10月）	整備5928隻で同87・2%（11年4月～13年7月）
なりわい（産業）	農地復旧率	当面の復旧対象311㌶に対し252㌶で復旧率81・0%（10月末）	復旧248㌶で復旧率79・7%（7月末）
なりわい（産業）	産地魚市場水揚げ量	4万7443㌧で震災前3年平均比−28・7%（4～9月）	1万8110㌧で震災前3年平均比−13・9%（4～6月）
なりわい（産業）	主要観光地入り込み客数（全県）	169万8107人で前年同期比−4・3%（7～9月）	176万7900人で同−1・1%（4～6月）

※各項目は断りのない限り沿岸12市町村の値。「現状」と「前回」のカッコ内は調査時点または期間

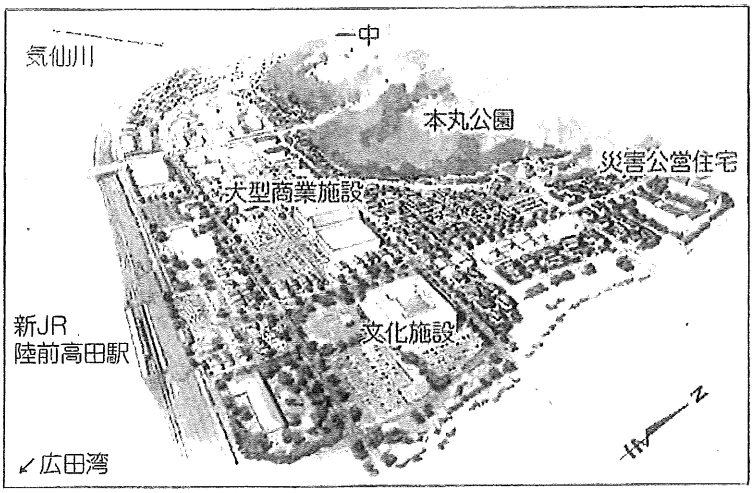
再生へ300ヘクタール区画整理

陸前高田市街地復興事業

最大10メートルかさ上げ

減歩率 高田36%、今泉57%

陸前高田市は28日夜、高田小で、被災市街地復興土地区画整理事業（区画整理）の事業計画案説明会を開き、高田地区189・8㌶、今泉地区約113㌶で区画整理を導入する計画を示した。300㌶を超える区域は、区画整理としては被災3県で最大。高台の開発とともに最大で3階建ての建物並みの約10㍍の盛り土を行い、市街地を再生。来年2月の事業認可を目指しており、約1200億円の大規模事業として東日本大震災で甚大な被害を受けたまちの再生がようやく本格化する。



陸前高田市が示した2015年度以降、建物建築が可能となる高田地区の中心市街地のイメージ図（施設や駅などの名称を加筆）

説明会には住民約150人が出席。区画整理を導入する高田地区と今泉地区の事業概要や工事スケジュールなどを説明した。

高田地区は、計画戸数約1560戸、人口約4300人。かさ上げの端部で海抜9～11㍍程度の高さまでかさ上げする。高台も含めた平均減歩率は36・3％。

道の駅用地だった大石沖、中川原地区は住宅地に見直した。先行整備する中心市街地約27㌶は2015年度半ばからの建物着工を計画する。

今泉地区は、戸数約560戸、人口約1600人。かさ上げの端部で海抜10㍍ほどまで盛る。高台も含めた平均減歩率は57・9％。

これまでの計画との変更点は1戸当たりの整備費が多額となる高台1（計画54戸）と希望者が少ない高台8（同12戸）の整備を中止。かさ上げエリアでは、先行整備エリア約3㌶は15年度後半で、その他は18年度から建物建築可能となる。

今後は事業計画案縦覧を経て、来年2月の事業認可を目指す。その後、14年度に換地の申し出を受け付け、15年度以降に仮換地指定が行われる。

また、事業区域内でかさ上げをしない、平地部に当たる高田地区51・1㌶、今泉地区15・3㌶で新たに防災集団移転促進事業（防集）を導入する。

説明会は12月1日午後7時からも高田小で行われる。

Memo

ソーシャルワーカーの声プロジェクト

日本福祉大学
上野莉恵・鈴木秀明・竹倉文恵・星野真希

東北地方太平洋沖地震について

- 発生日時
- 2011年3月11日　14時46日

- 仙台市市内の震度
- 震度7　・・・・　栗原市
- 震度6強・・・・　宮城野区

- 震度6弱・・・・　青葉区・泉区・若林区

⇒インタビュー先

活動日程

9月3日(月)
オリエンテーション・座学

9月4日(火)
被災地視察

9月5日(水)
ソーシャルワーカー インタビュー① せんだんの里 千脇隆志 様

9月6日(木)
ソーシャルワーカー インタビュー② 泉区地域包括 西澤英之 様

9月7日(金) グループ討論 ふりかえり

インタビューまで

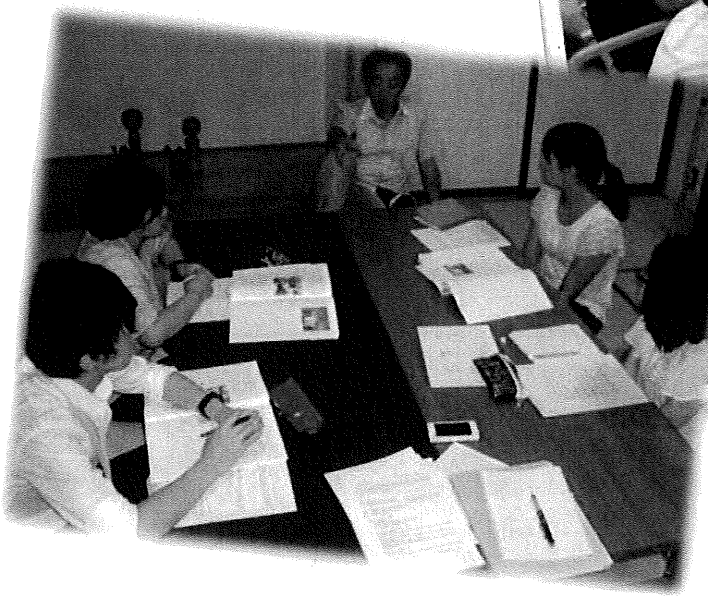
2012年
7月～8月
事前学習

2012年
9月4日(火)
フィールドワーク

2012年
9月4日(火)～
・グループワーク
・現地でのふりかえり
・被災地での疑問

インタビュー
留意点等　話しあい





引率教員と参加学生



水が引かなく
大きな水たまり



津波により
家の土台しかない状態



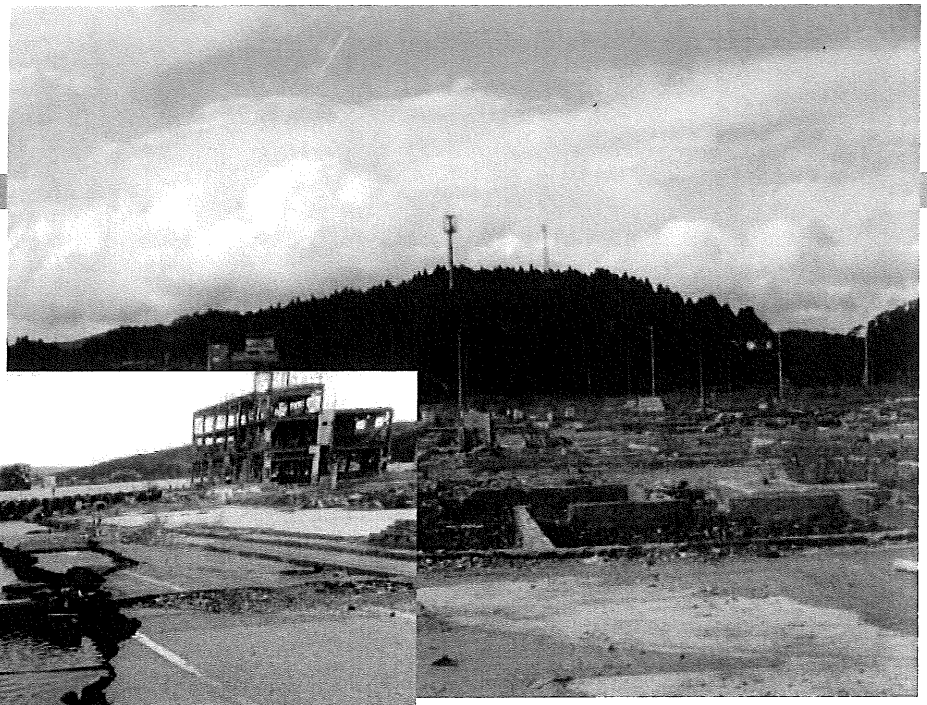
地盤は絶えず
ぬかるんでいる状態

家が崩壊
残ったとしても中は



撤去命令の
張り紙も・・・

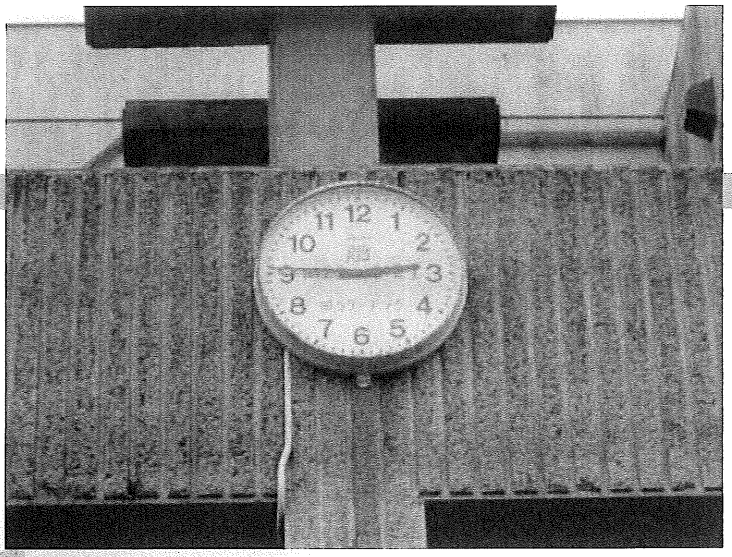
道路が陥没





潮が満ちて
その場にいられなく

2時46分
止まった時計





名取市立　閖上小学校



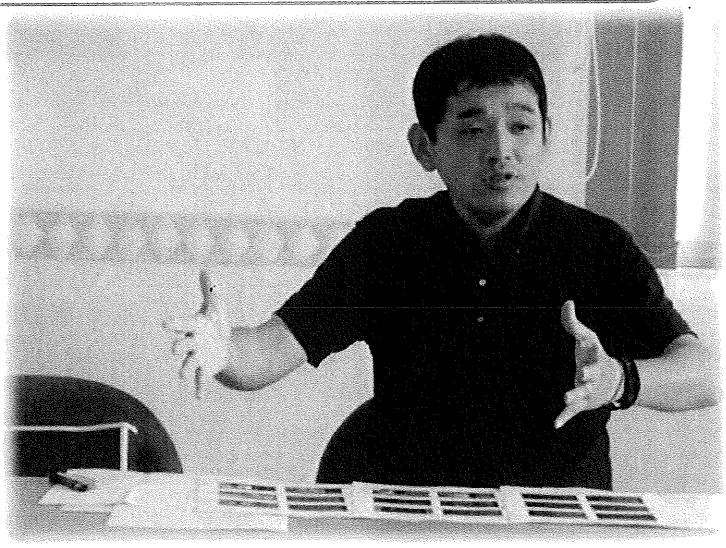
全28店舗の
商店街

南三陸
さんさん商店街

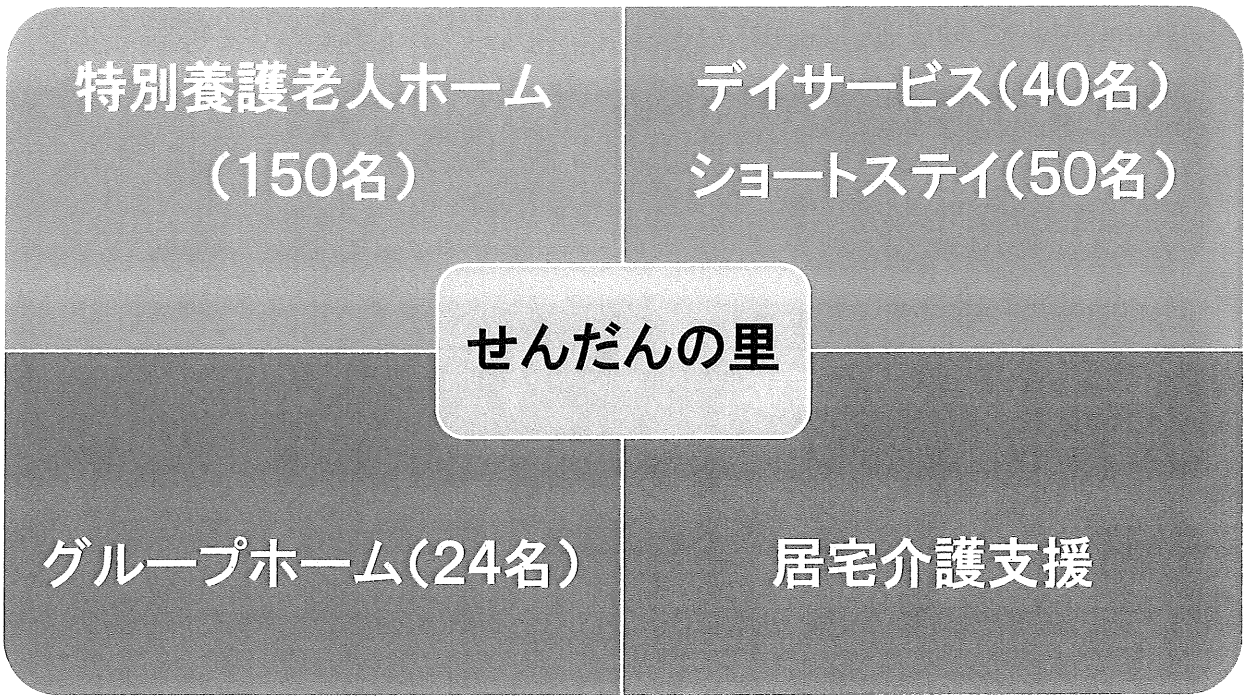
インタビュー①

□ 社会福祉法人　東北福祉会　せんだんの里

□ せんだんの里　副施設長　千脇隆志 様



せんだんの里の概要



インタビューまとめ

① 状況の確認

② “知っている”と“できる”の違い

③ 震災を忘れない

①状況の確認

建物の確認

ライフラインの確認

自分たちができることの確認

②“知っている”と“できる”の違い

防災マニュアルの存在

知っている職員　**現実**　知らない職員

“知っている”だけではなく
“できる”にしていくことが大切！

③震災を忘れない

震災を忘れてはいけない

繋がりをもっていたい

いろいろな人に知ってほしい

インタビュー②

- 仙台市泉区中央地域包括支援センター
- 地域包括支援センター 社会福祉士 西澤英之 様



仙台市泉区地域包括支援センター　概要

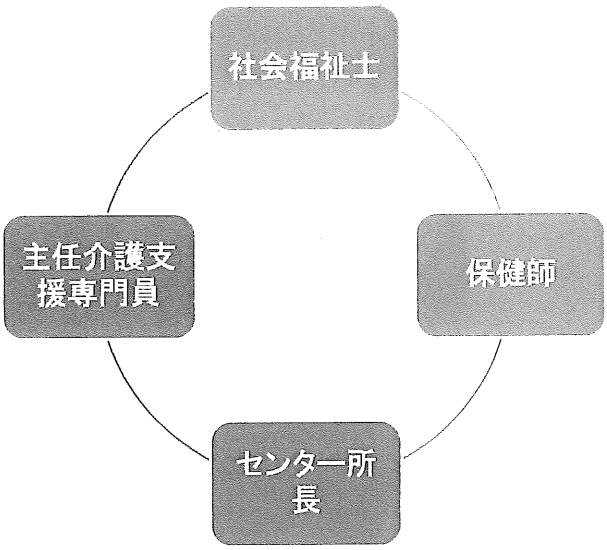
【主な業務】

①包括予防ケアマネジメント

②総合相談・支援

③権利擁護

④包括的・継続的ケアマネジメント支援



インタビューまとめ

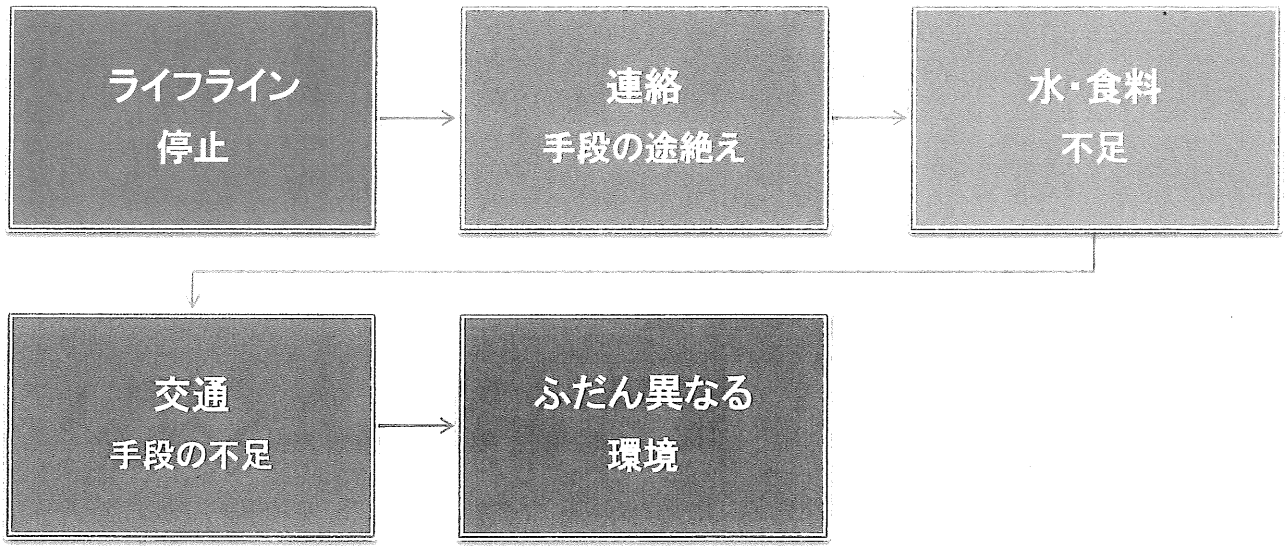
①　災害時の状況

②　被災時にとった行動

③　西澤さんの声

①災害時の状況(泉区)

震度6強の地震



②被災時にとった行動

- 民生委員といっしょに安否確認
→安否確認リストを利用
- 個別訪問…生活での悩み、相談等
- 行政との連携
- 住民との連携(インフォーマルな社会資源)

③西澤さんの声

□2次災害を出さない支援

□自分の地域に
死者を出したくない

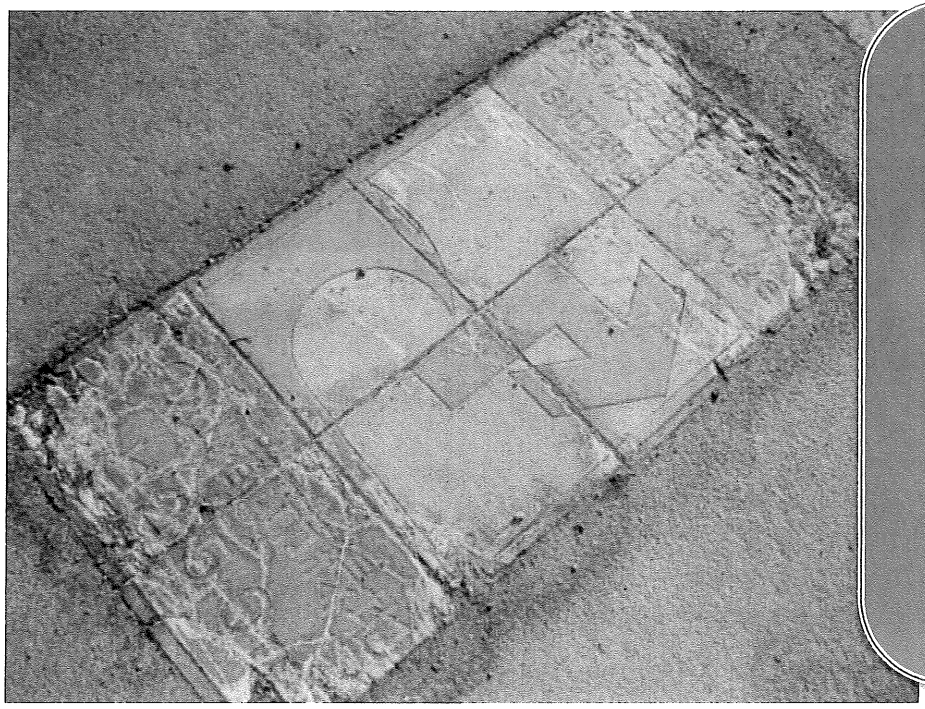
プロジェクトを経験して

①ふだん　*生活からの防災・減災意識*

②くせんした　*ソーシャルワーカーの専門性*

③しんらい　*人付き合いの大切さ*

①生活からの防災・減災意識



津波避難場所

誘導パネル

上の山都市緑地
あと250m

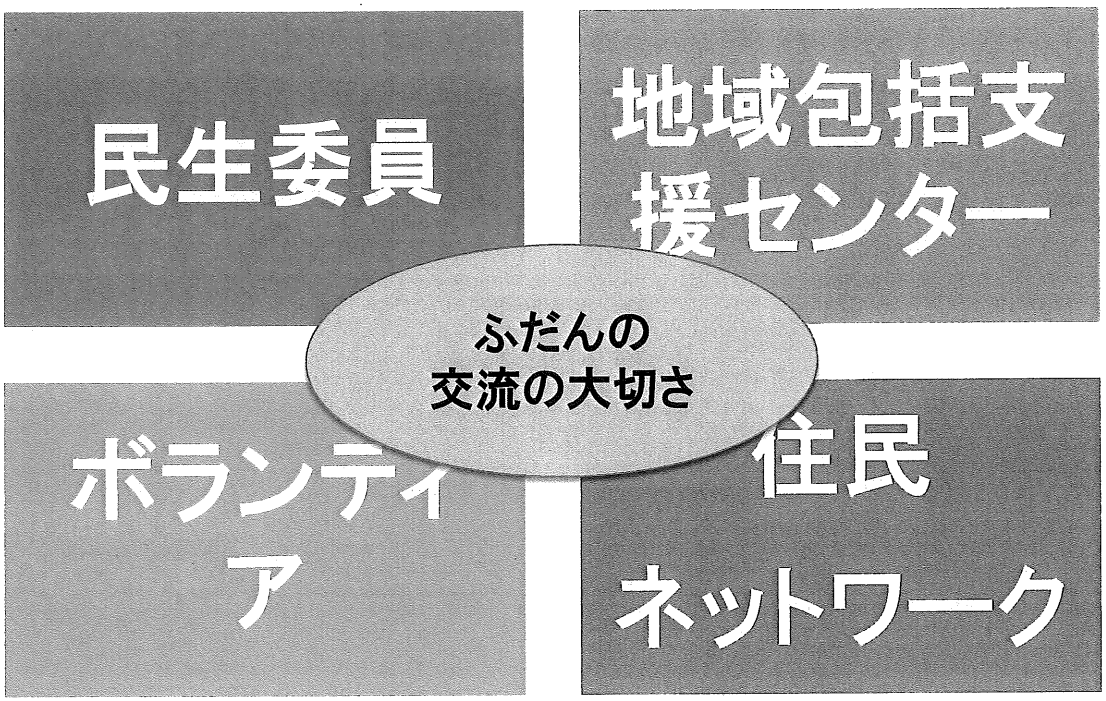
②ソーシャルワーカーの専門性

外的な損傷を治すわけでも
目に見える支援でもない

しかし“寄り添う”という
キーワードが生まれてきた

制度だけでない複雑な距離を
ソーシャルワーカーだからこそ対応できる

③人付き合いの大切さ



etc.

将来、ソーシャルワーカーとして大切にしていきたいこと

- ひとりひとりの住民が不安な思いをさせないように働きかけること（上野莉恵）
- 権利を主張できない人の権利を擁護していく（鈴木秀明）
- 人の思いに耳を傾けられるソーシャルワーカー（星野真希）

Memo

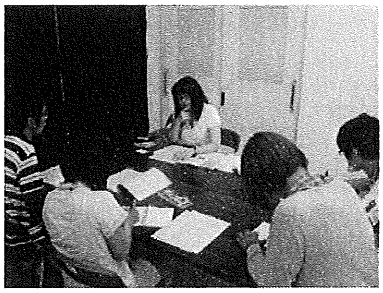
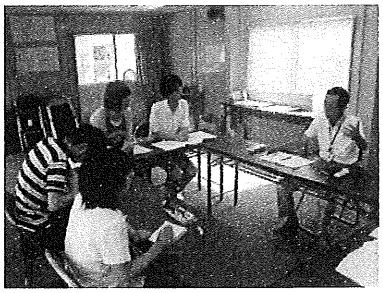
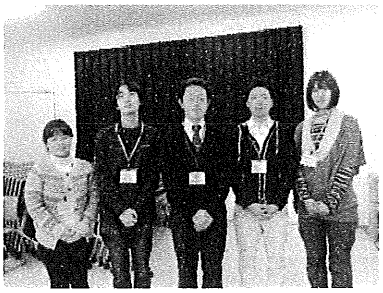
Memo

ソーシャルワーカーとしてのつながり
～岩手と宮城の被災地を通して～

中部学院大学人間福祉学部
小川侑希・石川智也
廣野美月・古田陽亮

被災地における
ソーシャルワーカーの活動

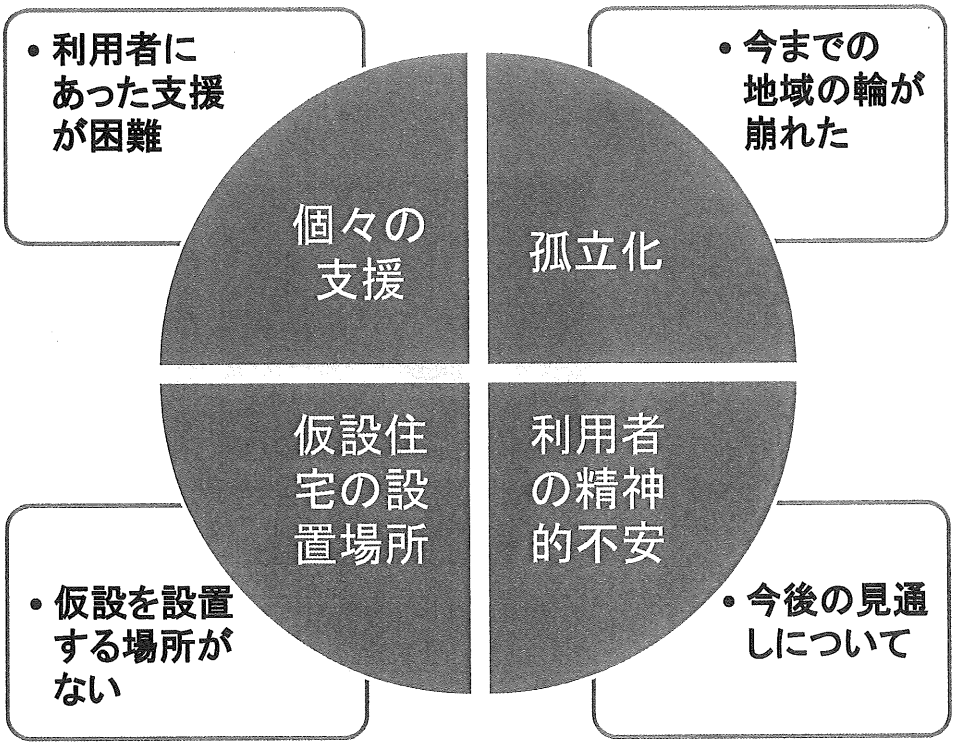
- □ 災害当日の活動
- □ 仮設住宅
- □ 連携
- □ 災害時の対策
- □ 今後の課題

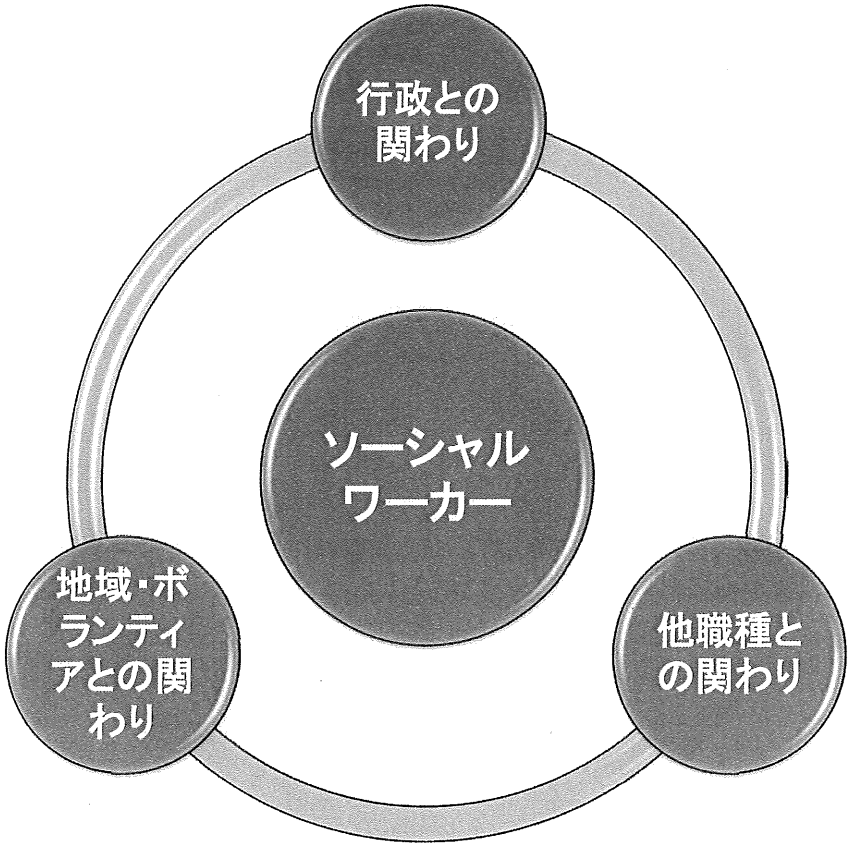

災害当日の活動

安否確認	• 職員が利用者の家に歩いて確認 • データの作成
物資の調達・配分	• ガソリンや発電機・食糧など • 個別に必要な物資がない
人々が求めるニーズへの調整	• 高齢者・障害者の方々への配慮 • 日常的支援

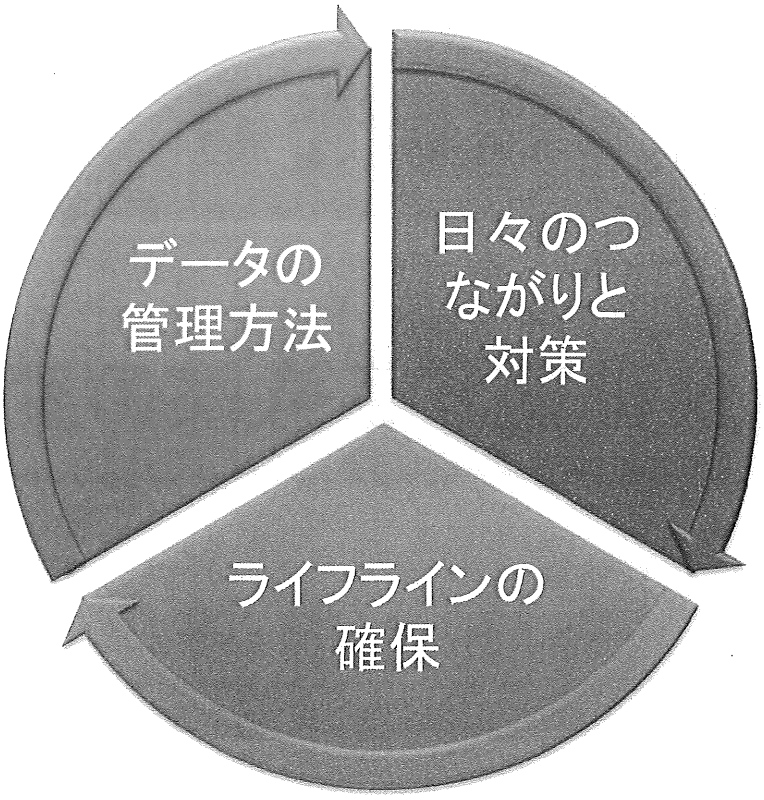
仮設住宅



連携


行政との関わり
ソーシャルワーカー
地域・ボランティアとの関わり
他職種との関わり

災害時の対策


データの管理方法
日々のつながりと対策
ライフラインの確保

災害時の対策

社会資源の
コーディネート
・ネットワーク作り

今後の課題

環境整備

震災に関する意識の変化

今後の見通し

Memo

Memo



ソーシャルワーカー“声”プロジェクト

学生“語り部”プロジェクト

関西福祉科学大学 社会福祉学部　社会福祉学科
4年　泉　綾子

1

関西福祉科学大学　学生チーム　インタビュー先

- 教育委員会　1名
- 居宅介護支援事業所　1名
- 社会福祉協議会　1名
- 社会福祉事務所　1名
- 障害者支援施設　1名
- 地域包括支援センター　7名
- 病院医療相談室　1名

（平成24年 第1次派遣 ～ 平成25年 第4次派遣）

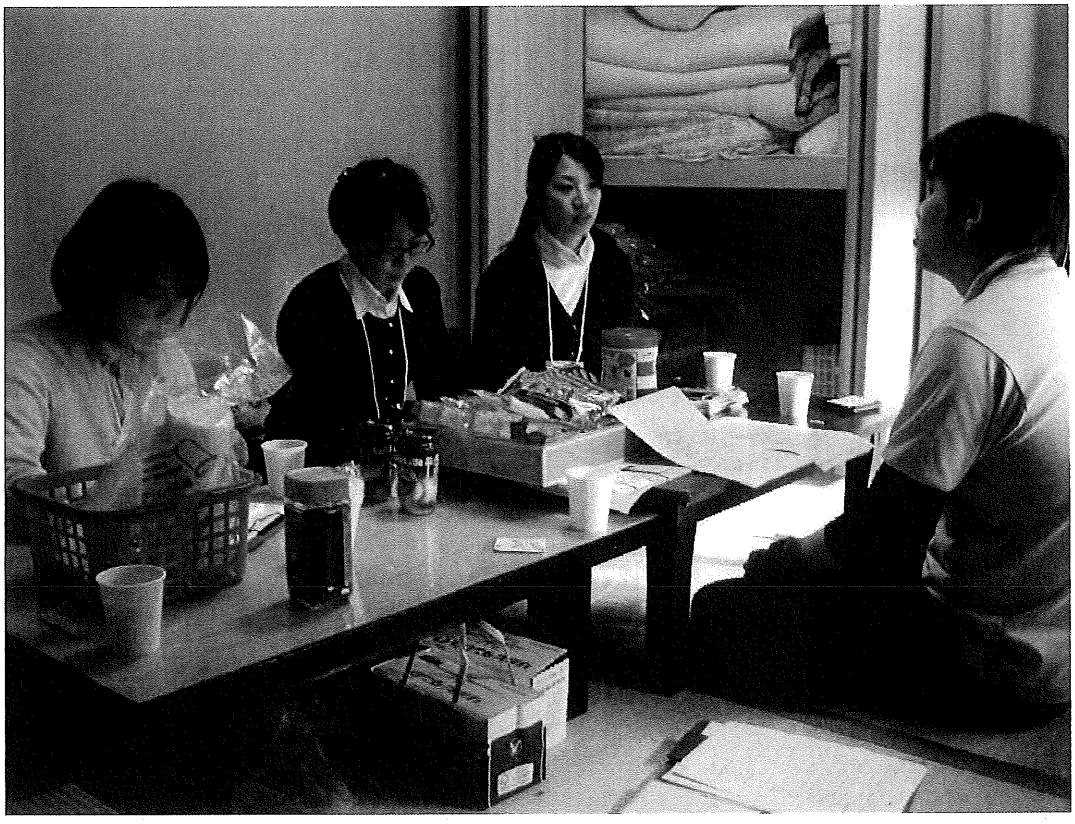
2

私たちが考えた被災者支援における
ソーシャルワーカーの専門性

3

インタビュー①

石巻市雄勝地域包括支援センター　鈴木健太氏



4

キーワード１

「初期的なアセスメントと気づき」

- 現場を見て、何が必要か、
  何ができるのかをイメージする

5

具体例

所属：石巻市雄勝地域包括支援センター　社会福祉士

震災から1年が経ち、お茶会や介護予防教室などのコミュニティの場を提供することが改めて重要だと思った。しかし、この場に参加できない人、参加しない人もいる。特に男性の参加が少なく、震災で仕事をなくし役割を見失った人、妻を亡くして家事ができずにいる人の存在に気づいた。

ソーシャルワーカーは、女性が集会所に集まってモノづくりをして、支えあう関係性を作ったり生きがいを見出したりしているように、男性向けのコミュニティの場の提供が必要だと考えた。

6

私たちの発見

ソーシャルワーカーは、限られた情報をもとに短時間で初期的なアセスメントを行う。一人ひとりのニーズに適した支援を行うとともに、地域のニーズへの支援も行っている。

現場を見て、
何が必要か、何ができるのかを
イメージする

キーワード2

介入時に“道具”を活用

・要援護者への介入時、きっかけ作りとして、“道具”を活用する等の工夫を行う

インタビュー②

石巻市渡波地域包括支援センター　高橋了氏



9

具体例

所属：石巻市渡波地域包括支援センター　社会福祉士

地域包括支援センターの認知度が低かったため、仮設住宅へのソーシャルワーカーの訪問を拒否される場合もあった。

「地域包括支援センターです」と言って訪問するのではなく、「先日、保健師が健康調査でお伺いしましたが、その後はお変わりありませんか」など、事前に行われた健康調査とつなげることで、対象者がソーシャルワーカーの訪問を受け入れやすくなるように工夫した。

10

私たちの発見

ソーシャルワーカーの認知度が必ずしも十分でないのが現状である。介入時に、健康調査、情報や物資の提供など、何らかの“道具”を使うことによって、今後の支援を円滑に進められるような関係を築くようアプローチしている。

要援護者への介入時、
“道具”を活用するなどの工夫をする。

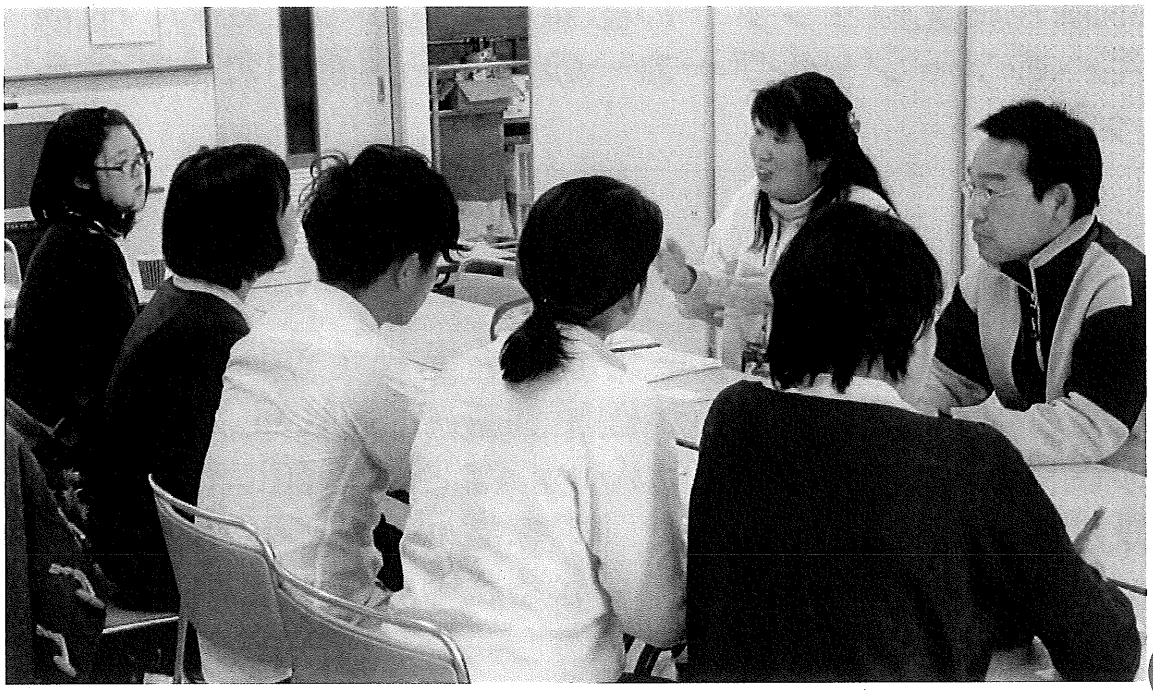
⇩

きっかけ作り

11

インタビュー③

登米市中田石越地域包括支援センター　石井知香子氏・三浦勝氏



12

キーワード3

アウトリーチによってニーズを見つける

・自分のニーズを表出できない人のニーズを、アウトリーチによって明らかにし、社会資源につなぐ

13

具体例

所属：登米市中田石越地域包括支援センター社会福祉士

震災から3日後。ある一人暮らしの高齢者宅へ安否確認に向かった。しかし、そこは無人で、家も半壊状態だった。心配になり、次の日も他の人の安否確認をしながらもう一度、そのお宅へ向かった。その方は帰宅していた。「昨日は親戚の人の家に泊まったが、今晩からはここに居る」と言う。

半壊状態の家がいつ倒壊するかわからず、最悪の場合命を落とす危険性もある。「それは、危ない」と説明し、避難所への移動を促した。

14

私たちの発見

対象者が定まらない災害時には、ソーシャルワーカーが積極的に外に出てニーズを見つけ出す必要がある。対象者が抱える問題に、対象者自身に気づいてもらえるように、ソーシャルワーカーがアプローチすることで、二次災害を防ぐことができると考える。

自分のニーズに気付いていない人
自分のニーズを表出できない人

⇩

アウトリーチによって
潜在的ニーズを発見し、社会資源につなぐ

15

インタビュー④

気仙沼市地域包括支援センター　村上章子氏



16

キーワード４

支援、資源とつなぐ

・対象者にとって必要な支援を工夫し、資源とつなぐことで、困難な状況の改善を試みる

17

具体例

所属：気仙沼市地域包括支援センター　社会福祉士

市民会館での避難所生活が続く中、精神障害を抱える方などが薬を飲み続けることができず、大勢の人との暮らしの中で不安定になる人が出てきた。他の避難者もイライラしてきて、両者ともに生活がしづらくなっていた。

市民会館内にある楽屋や廊下などを利用し、大勢の人と一緒に生活するのが難しい人のために、少人数で暮らせるように支援した。

18

私たちの発見

ソーシャルワーカーには、専門知識だけではなく、先を予測する力が求められる。現状を把握し、障害の特性を理解したうえでこれからの生活を予測する。その予測をもとに、次の支援を展開することができると考える。

被災者の将来を見立て

必要な社会資源とつなぎ

生活の質の向上を図る

19

結論１（ソーシャルワーカーの役割）

災害時におけるソーシャルワーカーの役割とは何か？

- 初期的なアセスメントと気づき
- 介入時に“道具”を活用
- アウトリーチによってニーズを見つける
- 支援、資源とつなぐ

20

結論２（平時と災害直後の違い）

	平時	災害発生直後
対象者	特定されている	不特定多数
介入先	人・地域・システムなど	状況
支援システム	組織主体	個人主体
支援方法	多様な方法	特定の方法

21

結論３（災害ソーシャルワークの専門性）

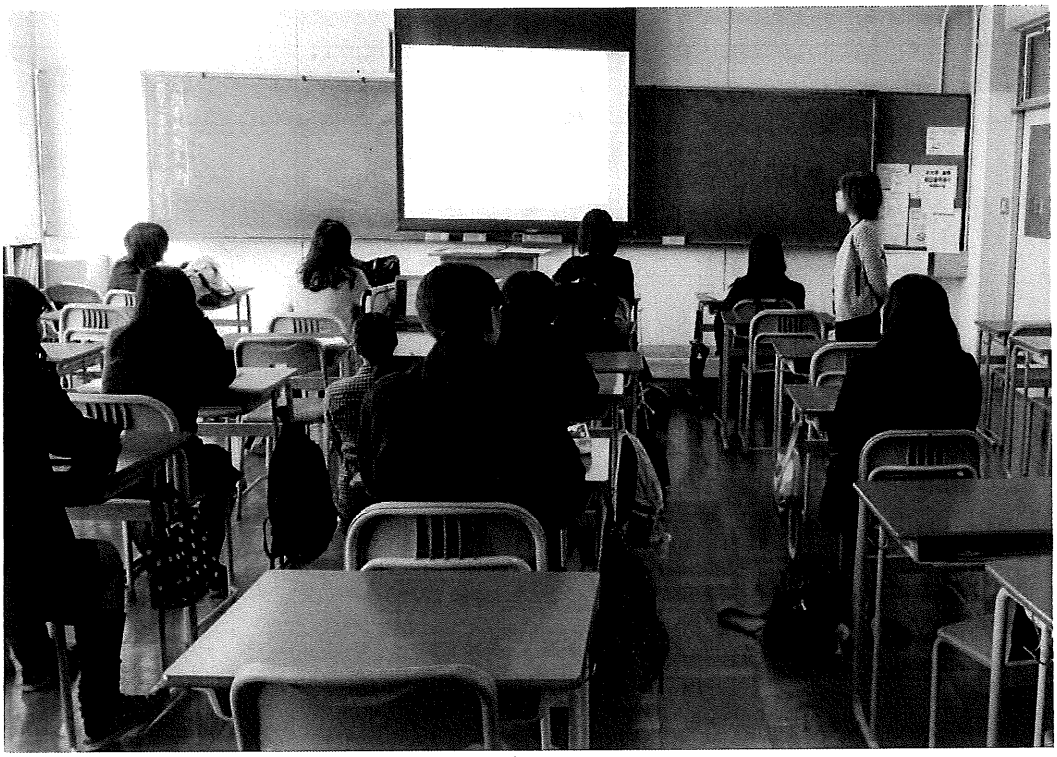
ソーシャルワーカーだからこそできた支援があったのか？

↓

無意識のうちにソーシャルワークの専門知識・技術を活かした支援をしていた。

22

学生“語り部”プロジェクト



23

学生“語り部”プロジェクト

- 福祉専門職の勉強会
  （現任ソーシャルワーカー、社会福祉士会）
- 一般向け
  （地域行事、社協主催の市民対象講座、学園祭）
- 高校生（介護福祉を勉強する高校生）
- 大学生（社会福祉、臨床心理）
- 東日本大震災復興支援に携わる団体のイベント
  （ひとぼうユースミーティング2012夏、2013春参加）

- 報告書作成
- ホームページを通じた発信
- 新聞などマスメディアを通じた発信

24

対象：現任ソーシャルワーカー（福祉専門職の勉強会）

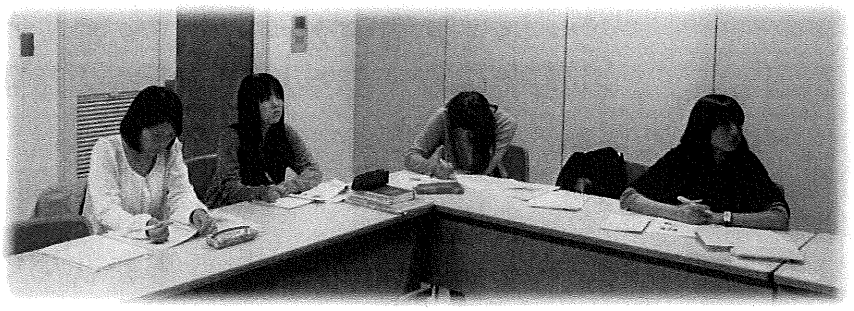
※テーマ

被災地で活動するソーシャルワーカーの声を伝える

※参加者の感想

「災害時、ソーシャルワーカーはどう動いたのか、どのような葛藤があったのかを知ることができました」

「ソーシャルワーカーとして災害が起きた時に何ができるのか考えようと思いました」



25

対象：大学生

※テーマ

災害時のソーシャルワーカーの活動と想いを伝える

※参加者の感想

「ソーシャルワーカーは人と人をつなぐパイプ役であり、それが被災者にとってとても重要な役割を果たしていたことがよく分かりました」

「ソーシャルワーカーを本気で目指そうと思いました」



26

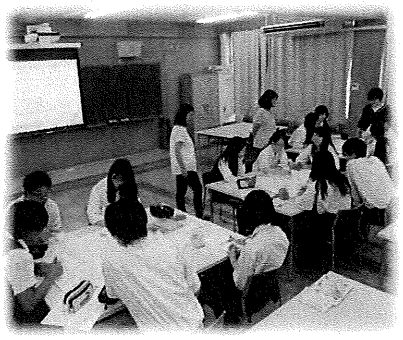
対象：一般（地域のお祭り）

※テーマ
ソーシャルワーカーってどんな人？
災害時のソーシャルワーカーの活動を伝える



※参加者の感想
「東北で被災しました。ソーシャルワーカーさんにお世話になりました」

対象：高校生（授業）



※テーマ
ソーシャルワーカーってどんな人？
災害時のソーシャルワーカーの活動を伝える

※参加者の感想
「ソーシャルワーカーの仕事を初めて知った」

27

私たちの想い

- 災害支援におけるソーシャルワーカーの役割を現任のソーシャルワーカーと一緒に考えていく
- ソーシャルワーカーを知ってもらう
- 「助かりました」という支援を受けた人々の声を「何もできなかった」と感じているソーシャルワーカーに伝える

↓

私たちが出来る後方支援

28

プロジェクトを通して学んだこと

- 被災者支援におけるソーシャルワーカーの専門性
- ソーシャルワーカーの後方支援の重要性
- ソーシャルワーカーという職業の魅力

29

ありがとうございました



ソーシャルワーカーの“声”プロジェクト　学生“語り部”プロジェクト
ホームページ
http://www.swvoice-fuksi-kagk-u.com/

30

Memo